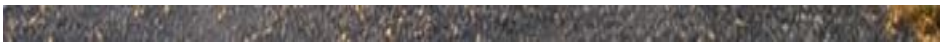
公益財団法人　明治安田こころの健康財団
第60回（2024年度）研究助成



発達障害のある高校生への卒業後を見据えた発達支援

「働くことを知る・学ぶプログラム」の開発と教育・福祉領域における活用例

令和７年３月

社会福祉法人旭川荘
旭川荘療育・医療センター
おかやま発達障害者支援センター

目次

はじめに
1 おかやま発達障害者支援センターにおける青年期支援(高校生年代)..... 2
2 おかやま発達障害者支援センターにおける成人期支援..... 3
3 冊子のコンセプト 4

Ⅰ 「働くことを知る・学ぶプログラム」の概要
1 プログラムのねらい 7
2 プログラムの構成..... 9

Ⅱ 個別のニーズとプログラム内容
1 目標設定や指導内容の検討について..... 12
2 自己についての多面的な理解に関するニーズ【障害特性・行動の特性】..... 13
3 自己管理能力に関するニーズ【体調管理・生活環境の調整】..... 15
4 人間関係形成や課題対応に関するニーズ【コミュニケーション、援助要請】..... 17
5 自分に必要となるサポートの理解に関するニーズ【作業体験と必要なサポート】..... 19

Ⅲ プログラムを活用した教育・福祉領域の機関への調査より
1 調査の枠組..... 21
2 導入前の課題やニーズ..... 23
3 導入後の反応や変化と機関への影響 25
4 考察 27

Ⅳ 教育・福祉領域における活用例
活用例 A) 高等学校における「通級指導」を通した取組..... 28
活用例 B) 高等学校における学校設定科目と LHR を活用した取組..... 30
活用例 C) 高等学校における「総合的な探究の時間」を活用した取組 33
活用例 D) 特別支援学校における教員間の連携体制を意識した取組 36
活用例 E) 放課後等デイサービス事業所における個別支援での取組 39
活用例 F) 放課後等デイサービス事業所における小集団での取組..... 42

Ⅴ 資料編
1 講義資料:「学校と職場の違い」 シリーズ 45
2 講義資料:「よくある疑問や苦手意識」 シリーズ..... 46
3 ワークシート:「プロフィールシート」・「トリセツ」..... 48

Ⅵ 研究協力
1 本成果物作成に協力いただいた皆さま 51
2 コメント 52

謝辞..... 54
<引用・参考文献> 55

はじめに

発達障害のある高校生の卒業後の進路は、進学、一般企業への就職を目指す場合、障害者雇用を目指す場合、あるいは、労働や福祉領域の支援機関の利用をしながら就労準備に取り組むなど、様々な進路が考えられます。

卒業後の進路を少しずつ考える際には、将来なりたい自分や、興味関心があること、そして、自分の特性を踏まえた環境選びが土台になります。特に、一人ひとりのペースに合わせて、自分の特性を理解しておくことは、自分に合った環境を選んでいく上でも、新しい環境に進んだ際に周囲の人たちからの理解や支援を得る上でも、大切な準備と言えます。

卒業後を見据えた発達支援として、取り組む内容は多岐に渡ります。その中から何を優先的に取り組むかを検討するには、生徒一人ひとりの個別のニーズを考慮することが必要です。一方で、実際にどこから始めたらよいか、どのように取り組めばよいかが難しいと感じている支援者の方々の声もお聞きしてきました。

おかやま発達障害者支援センターでは、成人期の相談を受ける中で、成人期の自立した生活に向けた準備に少しずつ取り組むことができる機会があればと考えてきました。この冊子は、地域の大学と協働して高校生年代向けに取り組んできた支援プログラムを、「働くことを知る・学ぶプログラム」として整理したものです。その内容は、「働くことを知る」という要素だけではなく、「自分のことを知る」という要素も意識したものになっています。今回、公益財団法人明治安田こころの健康財団 第 60 回（2024年度）研究助成をいただく機会を得て、プログラム活用をいただいた支援機関の担当者の方々に調査を実施し、それぞれの機関のカリキュラムや体制に合わせた活用例、課題、気づきを加えた成果物を作成しました。

「働くことを知る・学ぶプログラム」は、『在学中からできる卒業後を見据えた発達支援』となることを目指して作成したものではありますが、当然ながら十分な内容を網羅しているものではありません。高等学校や放課後等デイサービス事業所等の担当者の皆さまが、それぞれの現場で把握されている個別のニーズに合わせて、『発達障害のある青年一人ひとりを理解するきっかけ』の１つとして、ご活用・ご参照いただければ幸いです。

＜研究代表者＞
社会福祉法人旭川荘　旭川荘療育・医療センター
おかやま発達障害者支援センター　池内　豊
水木　祥子、小松原　誠二、新谷　義和

1 おかやま発達障害者支援センターにおける青年期支援(高校生年代)

高校生年代の進路・就労に関する相談が寄せられていたことから、2013年(平成25年)から、地域の大学と高等学校と協働して、高校生年代を対象としたインターンシップ体験の場の創出に取り組み、**「オープンカレッジ in 美作大学」**[1]を実施してきました。

この取組をもとに、2019 年(令和元年)に、『発達障害のある高校生に対するキャリア教育プログラム(働くことを知る・学ぶプログラム)』を開発しました。本プログラムは、発達障害のある高校生(知的障害がない人から軽度知的障害がある人)や、支援や配慮が必要と思われる高校生を対象とした、12コマの(指導案・講義・ワークシート・寸劇動画)で構成されています。

その後、特別支援学校や高等学校のキャリア教育を取り扱う授業の中で試行実施する取組につながり、2022年(令和4年)には、複数の高等学校や放課後等デイサービス事業所で活用する取組に広がりました。そこで今回、活用いただいた機関における実践例や導入前後の課題やニーズの整理を行いました。

2013年～	➡	2019 年	➡	2020 年～	➡	2022年～
地域の大学と高等学校と協働した「オープンカレッジ in 美作大学」をスタート		発達障害のある高校生に対するキャリア教育プログラム(働くことを知る・学ぶプログラム)の開発		特別支援学校や高等学校のキャリア教育を取り扱う授業での取組		複数の高等学校や放課後等デイサービス事業所での活用

この冊子は、発達障害のある青年(高校生年代)の支援に携わっている皆さまに、「発達障害のある高校生への卒業後を見据えた発達支援」の参考にしていただきたいと考え作成しました。成人期に向けてどのような準備や支援をしていったらよいかという点について、日々の支援を通じて、私たちが大切と感じている点は以下のとおりです。

- 自分がストレスを感じやすいことや自分の疲れのサインを知っておくこと
- 休憩時間の過ごし方のレパートリーを持っておくこと
- 生活・学習・仕事の進捗を家族や担当者などに報告できること
- 困ったことなどを自分なりのコミュニケーション方法で伝えること
- 自分の特徴を身近な支援者と一緒に整理しておくこと
  得意なこと、苦手なこと、対処方法、理解してほしいことや配慮してほしいこと
  好きなもの、興味があるもの など

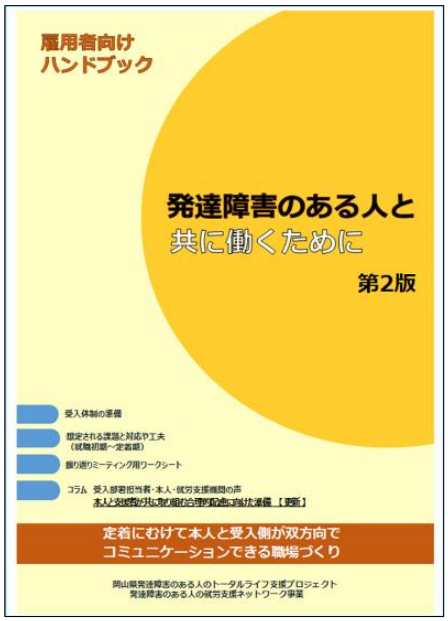
将来に向けてサポートを減らしていくことよりは相談したりサポートを受けてみたりして良かった経験を積むこと

[1] 薬師寺明子、おかやま発達障害者支援センター(2023):障害のある人を対象としたオープン・カレッジの実施:発達障害のある高校生の進路選択支援・知的障害のある人への学習機会の提供. 美作大学・美作大学短期大学部地域生活科学研究所所報, pp41-47.

2 おかやま発達障害者支援センターにおける成人期支援

おかやま発達障害者支援センター(以下、センター)では、発達障害のある人とその家族からの相談、支援機関と個別の支援について検討を行う間接的支援、そして、市町村自治体や関係機関と協働して身近な地域の支援体制づくりに取り組んできました。

青年・成人期の相談を行う中では、**困りごとへの対処について、日々の生活・就労の中で本人が出来ている点を一緒に確認することを土台にして、本人が続けられそうなことや周りの人に理解や配慮をお願いしていくことを一緒に考えるスタンス**を大切にしてきました。



センターでは、2016年(平成28年)に、「岡山県発達障害のある人のトータルライフ支援プロジェクト」の取組の１つとして、岡山県子ども・福祉部障害福祉課、岡山県教育庁特別支援教育課を中心とした県庁内関係各課と、就労支援の専門機関である岡山障害者職業センターと協働して、県庁に発達障害のある人を研修生として受け入れる「岡山県発達障害のある人の職場研修事業」を立ち上げました。

目的は、研修生に事務補助業務の研修機会を提供することと受入部署が合理的配慮を学ぶ機会とすることにあります。その成果物として**「雇用者向けハンドブック　発達障害のある人と共に働くために」**[2]を作成しました。

この職場研修事業では、『自分のセールスポイント、苦手な点と自分の対処、配慮を希望すること』を記載したナビゲーションブックを、本人・受入部署・就労支援機関で一緒に確認した上で研修をスタートし、研修経験を定期的に振り返って得られた気づきをもとに、ナビゲーションブックを更新する取組を行っています。

こうした取組を整理し、2024年(令和6年)に、ハンドブック第２版に「本人と支援者が共に取り組む合理的配慮に向けた準備」として、追加掲載しました。

このように、**成人期のステージでは、『就労準備経験を通して、本人と就労支援機関の担当者とで特性を段階的に整理し、その内容を雇用者側に伝えて必要な合理的配慮を話し合う』**ということが行われるようになってきています。

---

[2] 岡山県こども・福祉部障害福祉課(2024):雇用者向けハンドブック 発達障害のある人と共に働くために　第2版(R6年3月発行). https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/919509_8796997_misc.pdf (2025/01/15参照)

3 冊子のコンセプト

(1) 冊子の対象

この冊子は、**発達障害のある高校生に日々関わる高等学校や特別支援学校等の教員と、放課後等デイサービス事業所の職員**の皆さんに参考にしていただきたいと思い作成しました。**「発達障害のある高校生年代への卒業後の就労・進学を見据えた準備」**は、当然ながら卒業年度に進める進路指導や移行支援に限定したものではなく、高等学校に入学した時から取り組むものであり、それ以前の小学校中学校年代も含め、発達段階に合わせて取り組んでいくものです。また、短期間の支援プログラムではその効果は限定的であり、学んだことを実生活に汎化させることも苦手とされていることから、**日々の学校生活や家庭生活における出来事や経験を題材にすることが、生徒の個別のニーズと関連づけた準備につながる**と考えます。こうしたことから、当所で開発した支援プログラムのエッセンスをお伝えすることで、学校現場や事業所の実情に合わせて取り入れていただくことをねらいとしています。

(2) 冊子の中で用いているキーワード

冊子のタイトルに設定した、**『発達障害のある高校生への卒業後を見据えた発達支援』**は、**教育領域と福祉領域の両方に関連するテーマ**と言えます。例えば、中学校までは特別支援学級に在籍していた生徒が通級による指導(以下、通級指導とする)を行う高等学校や職業科を設置する特別支援学校高等部に進学する、また放課後等デイサービス事業所を利用するケースなどが考えられます。

「キャリア教育」とは

そこで本冊子では、卒業後を見据えて在学中から取り組んでいく準備に関して、教育領域と福祉領域の双方のキーワードを用いています。ひとつは、**「キャリア教育」**です。キャリア教育とは**「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度**を育てることを通して、**キャリア発達**を促す教育」であると定義されています[3]。「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度」とは、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」から構成される**「基礎的・汎用的能力」**のことを指しています。「キャリア発達」とは、「社会の中で**自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現**していく過程」のことをいいます。[3]

また、高校生年代のキャリア教育の充実と、特別支援教育の観点から見た特別支援学校高等部や高等学校に在籍する発達障害等のある生徒への指導・支援について、次のように述べられています。

文部科学省(2018)高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)	文部科学省(2018) 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告
第1章 総則 第5款 生徒の発達の支援 (3)生徒が, **学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら,** 社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう, **特別活動を要としつつ各教科・科目等の特質に応じて,** キャリア教育の充実を図ること。その中で, 生徒が自己の在り方生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう, **学校の教育活動全体を通じ, 組織的かつ計画的な進路指導を行うこと**。	Ⅴ. 関係機関の連携強化による切れ目ない支援の充実 2. 在学中の連携 **特別支援学校高等部や高等学校に在籍する発達障害等のある生徒**に、**在学中から、自分の得意なことや苦手なことなどの自己理解を促し、その対処法を学びながら自信を高めるような指導や支援の充実**が必要である。また、**卒業後の進路先に、必要な配慮の提供、環境整備についての情報が引き継がれるように**、関係機関との連携促進も求められる。

※ 下線と太字表記は筆者によるもの

[3] 中央教育審議会(2011):今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf (2025/03/09参照).

「発達支援」とは

もう 1 つのキーワードは、**「発達支援」**です。「発達支援」とは、発達障害者支援法（2005 年施行、2016 年一部改正）において、「発達障害者に対し、**その心理機能の適正な発達を支援し、及び円滑な社会生活を促進するため行う個々の発達障害者の特性に対応した医療的、福祉的及び教育的援助**をいう。」と定義されています。また、放課後等デイサービスガイドライン[4]では、「障害の特性を踏まえたニーズに応じた発達支援」について、次のように述べられています。

こども家庭庁（2024）放課後等デイサービスガイドライン
3. 障害児支援の基本理念 （1）障害の特性を踏まえたニーズに応じた発達支援の提供 こどもの発達全般や障害の特性・行動の特性等を理解し、こどもの発達及び生活の連続性に配慮し、こどもの今の育ちの充実を図る観点と**将来の社会参加を促進する観点**から、**こどものウェルビーイングの向上**につながるよう、必要な発達支援を提供することが必要である。 また、**障害の特性による二次障害を予防する観点**も重要であることから、こどもの特性に合わない環境や不適切な働きかけにより二次障害が生じる場合があることを理解した上で支援を提供するとともに、こどもの支援に当たっては、こども自身が内在的に持つ力を発揮できるよう、**エンパワメントを前提とした支援**をすることが重要である。

※　下線と太字表記は筆者によるもの

本冊子で紹介する「働くことを知る・学ぶプログラム」は、**就労に向けた準備に限定しておらず、「自己についての多面的な理解」「自己管理能力」「人間関係形成や課題対応」「自分に必要となるサポートの理解」という複数の要素**で構成しています。これは、紹介した上述の「キャリア教育」が、就職に向けた準備や狭義の進路指導に限定したものではなく、社会的・職業的自立に向けた基盤となる能力や態度を育むものであることと、こども家庭庁（2024）が放課後等デイサービスガイドラインで述べている「将来の社会参加を促進する観点」「こどものウェルビーイングの向上」にもつながるものと考えています。また、発達障害者支援法における「発達支援」の定義の中で、「円滑な社会生活を促進するため行う個々の発達障害者の特性に対応した医療的、福祉的及び教育的援助」と述べられていることから、**「卒業後を見据えて在学中から取り組んでいく準備」は、教育領域や福祉領域で目指す支援・指導と重なり合う部分があることが分かると思います。**

本プログラムでは、**各コマの活動や校内・事業所内の既存の活動を通して、生徒の自己評価や捉え方を把握しつつ、成功体験を一緒に振り返りながら、プロフィールやトリセツにまとめていく流れ**を作っています。これは、「発達障害のある高校生」に対する「卒業後を見据えた準備」として、文部科学省（2018）が「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告」の中で、「在学中から、自分の得意なことや苦手なことなどの自己理解を促し、その対処法を学びながら自信を高めるような指導や支援の充実」を掲げていることと、放課後等デイサービスガイドラインで述べている障害の特性による「二次障害を予防する観点」「エンパワメントを前提とした支援」と同じ方向性と言えます。

そして、本冊子では、**通級指導を行う高等学校をはじめ、定時制・単位制高校や特別支援学校など、発達障害のある生徒が進学する可能性のある様々な学校種における導入プロセスやそれぞれの機関のカリキュラムや体制に合わせた活用例**を掲載しています。これは、文部科学省（2018）が高等学校学習指導要領の「生徒の発達の支援」について、「特別活動を要としつつ各教科・科目等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図ること」「学校の教育活動全体を通じ，組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」など、学校の体制に合わせて生徒の発達の支援に取り組んでいくことを述べている点からも、貴重な実践と考えています。本冊子が、それぞれの領域の枠組に合わせた実践につながれば幸いです。

---

[4] こども家庭庁（2024）：放課後等デイサービスガイドライン（令和6年7月）．https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/7692b729-5944-45ee-bbd8-f0283126b7db/def1acaf/20241101_policies_shougaijishien_shisaku_guideline_tebiki_06.pdf （2025/01/15 参照）．

Ⅰ　「働くことを知る・学ぶプログラム」の概要

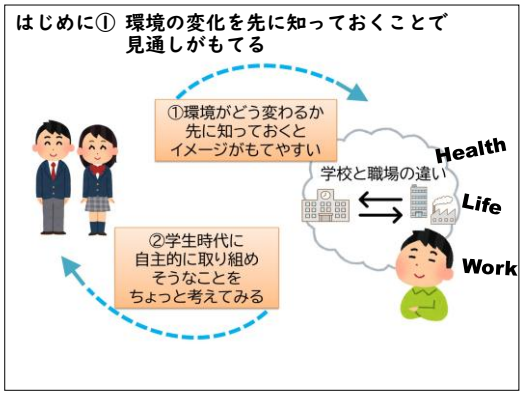
1 プログラムのねらい

本プログラムの作成にあたっては、発達障害のある高校生年代の生徒が、卒業後に就労や進学へ円滑に移行するためには、どのような視点から準備を支えていくとよいかを考えてきました。そこで、どのような主旨でプログラム作成をしてきたかについて紹介します。 ※文中スライド：本プログラム①　講義資料「学校と職場の違いを知ろう」より

(1)「環境の変化を先に知っておくことで見通しがもてる」

日戸(2013)[5]は、自閉スペクトラム症(ASD)のある人が就労し仕事が安定するまでの道のりにあるバリアとして、「ASD のある人にとって自分の適性を認識することが苦手」であることをあげています。

また、「就活に取り組む上で、『こうであらねばならない』という思い込みを持ちやすく、誤った対処方法を取りがち」であることや、極度の不安やストレスから様々な身体の不調を呈する場合があることにも触れています。

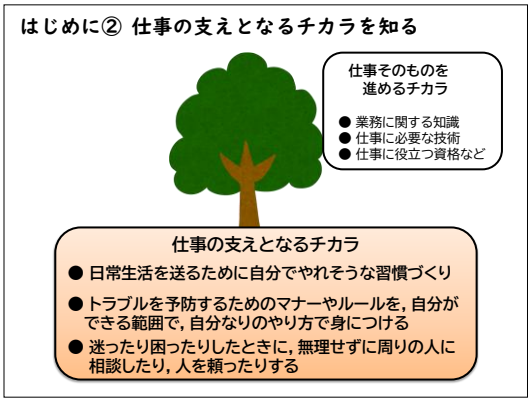


こうしたリスクを予防するために、「具体的な体験を伴った支援プログラムが必要性」であり、「職業生活は、あらゆる点で学校生活と異なるというごく基本的な構図を本人が十分に理解することが大切」であると述べられています。

そこで、本プログラムでは、**「環境の変化を先に知っておくことで見通しがもてる」**ことから導入し、**「学校と職場の違い」**をキーワードに、職場の人間関係や暗黙の了解などを解説していきながら学んでいく構成にしています(Ⅴ資料編を参照)。

(2)「仕事の支えとなるチカラを知る」

梅永(2015)[6]は、発達障害のある人が離職する場合に、仕事そのもののスキル(ハードスキル)よりも、仕事の支えとなるライフスキル(ソフトスキル)の不足が関与していることを課題にあげています。また、「発達障害のある子どもは対人関係のやりとりが根本的に苦手」であると述べています。



ライフスキルを身につけていくポイントとして、どんどんスキルを伸ばすよりは「必要なことだけ」、苦手なことまで無理に練習する必要はなく「できるところから」、ひとりで練習するのではなく家族や支援者に「たすけてもらって」をあげています。

そこで、本プログラムでは、「仕事そのものを進めるチカラ」よりも、**「仕事の支えとなるチカラを知る」**ことに焦点を当てています。加えて、**「よくある疑問や苦手意識」**という小テーマを講義の後半に設けて、自分に合った(自分の特性に合った)自己管理やリカバリー方法を考えるようにしています。(Ⅴ資料編を参照)

---

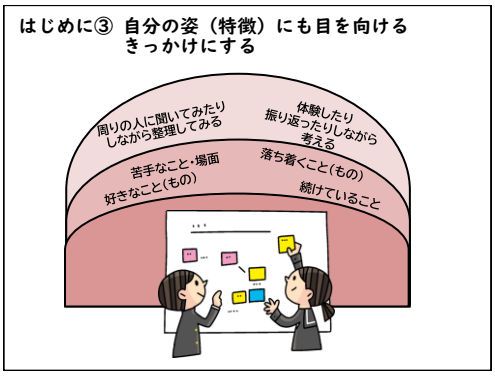
[5] 日戸由刈(2013)：就労への道のりに存在するバリア. 本田秀夫・日戸由刈編著, アスペルガー症候群のある子どものための新キャリア教育. 金子書房, pp.22-29.

[6] 梅永雄二(2015)：15歳までに始めたい！発達障害の子のライフスキル・トレーニング. 講談社

（3）「自分の姿（特徴）に目を向けるきっかけにする」

榎本（2023）[7,8]は、進路先の意思決定に向けて、高等学校で期待される指導・支援として、就労する場合も進学する場合も共通して、「仕事理解」と「自己理解」をあげています。ここでいう「仕事理解」とは、「進路や職業、キャリアルート等について理解を深めること」（職業の種類や内容、求められる能力、職業につく方法、労働市場の状況、働く上で必要なマナー等の知識を含む）です。「自己理解」とは、「自身の進路や職業、キャリア形成に関して理解を深めること」（自身の価値観や興味、自身の能力や適性、自身を取り巻く家庭や地域等の条件を含む）です。

発達障害のある人の場合、未体験のことはイメージが持ちづらいことがあります。就労して失敗経験から自分の特性に合った仕事について考えるより、体験的な学びを通した自己理解が大切であることを述べています。また、進学する場合も、進学先の向こうにある社会を意識して、「進学先での学びに対する自身の適性を考えておくことも重要」と述べています。



そして、高校生年代で一定の自己理解が求められることから、自己理解を深める方法として、キャリア教育の充実に向けて導入された「キャリア・パスポート」や自分についての説明文書「トリセツ」を紹介しています。

そこで、本プログラムでは、**「プロフィールシート」と「トリセツ」**を作成しています（Ⅴ資料編を参照）。プロフィールシートは、書くことの負担軽減や本人や周囲の支援者とも話し合いやすくするねらいから、選択式にしてあります。用い方としては、プログラム①でプロフィールシートに記入し、色々な学びや体験をしたあとにプログラム⑪で更新をして、プログラム⑫でトリセツに転記していく段階的な手続きをとっています。これまでに本プログラムを学んでくれた生徒の反応として、最初は自分について向き合うことに抵抗感があったが、先生から自身の良い面についてフィードバックを受けたり、インターンシップでの成功体験や課題点を振り返ったりする中で、少しずつ前向きに作成する様子が見られたと聞いています。

---

[7] 榎本容子（2023）：就労に向けて高等学校で期待される指導・支援について教えてください. 発達障害のある高校生のキャリア教育・進路指導ハンドブック－就労支援編－. 榎本容子・井上秀和編著. 学事出版, pp42-47.

[8] 榎本容子（2023）：進学に向けて高等学校で期待される指導・支援について教えてください. 発達障害のある高校生のキャリア教育・進路指導ハンドブック－進学支援編－. 榎本容子・井上秀和編著. 学事出版, pp38-43.

2 プログラムの構成

（1） プログラムの対象者

本プログラムは、**発達障害のある高校生（知的障害がない人から軽度知的障害がある人）や支援や配慮が必要と思われる高校生を対象**とした、12コマ分の指導案・講義資料・ワークシート・寸劇動画で構成されたプログラムです。各種資料には『発達障害』という言葉は使用していませんので、どの生徒さんにも学んでいただける内容になっております。

留意点として、下記にある通り、「自分の姿 （特徴）に目を向ける」内容も盛り込まれていることから、**個別で実施するか集団で実施するかについては、想定している生徒と担当者や周囲の生徒との関係性を考慮しながら検討してください。**また、対象となる生徒の状態像として、**学習上の困難さや対人関係の状況等から学校に登校しづらい状態にある場合は、本プログラムの利用時期について検討が必要です。**

本プログラムの主な要素や特徴

① 環境の変化を先に知っておくことで見通しがもてる
② 知る、体験する、振り返るサイクルで学ぶ
③ 自分の姿（特徴）にも目を向けるきっかけにする

（2） 各コマのテーマと進め方の例

「将来なりたい自分」や「自分の姿（特徴）」を考えるきっかけとして

プログラム①
学校と職場の違いを知ろう

インターンシップや実習前の自己チェック（再点検）に進学でも就職でも共通した話題として

プログラム②
食事と睡眠の大切さを知ろう

プログラム③
朝の準備や段取りを考えよう

プログラム④
身だしなみを整えることの重要性を知ろう

職場で役立つ振る舞いや対人関係上のトラブル予防のための基礎知識として

プログラム⑤
報告・連絡・相談について知ろう

プログラム⑥
挨拶と報告のマナーを知ろう

プログラム⑦
上司の役割を知ろう

職場で役立つ振る舞いやコミュニケーションを練習してみる機会として、また、サポート環境がある場合とない場合を試してみる機会として

プログラム⑧
作業体験 1 事務作業（体験し、振り返る）

プログラム⑨
作業体験 2 図書館作業（体験し、振り返る）

※既存の実習、インターンシップ、学校行事なども含めた体験の機会を活用

職種によって求められることや職場環境の特徴を知り、自分の特徴と照らし合わせながら、希望する職種、希望しない職種を考えてみる機会として、また、自分の特徴を整理し、必要に応じて就職活動や進学の際に周囲の人に伝える準備として

プログラム⑩
これまでの経験を振り返ろう

プログラム⑪
プロフィールシートに記入してみよう

プログラム⑫
自分の取説「トリセツ」を作ろう

（3）参考：各コマの流れ　※プログラム②～⑦の場合

3時間目
『朝の準備や段取りを考えよう』の場合

＜本時の流れ＞
1．「チェックリスト」記入
2．講義
3．軽演劇の視聴
4．ワーク
5．「まとめ」記入
　「今日の振り返り」記入

①

1．「チェックリスト」記入

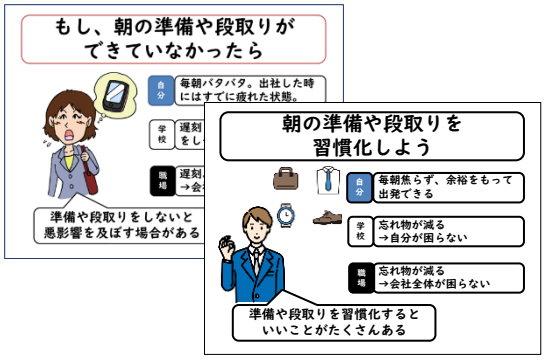
目的：生徒の現状を把握・共有する
　　生徒自身が振り返る

	チェックリスト（コミュニケーション）	自己評価（◎or○or△）
1	あいさつをしている。 「おはよう」、「ありがとう」、「すいません」等	家族に（　）、友達に（　）、先生に（　） 近所の人に（　）、初対面の人に（　）
2	報告をしている。 「できました」、「終わりました」等	

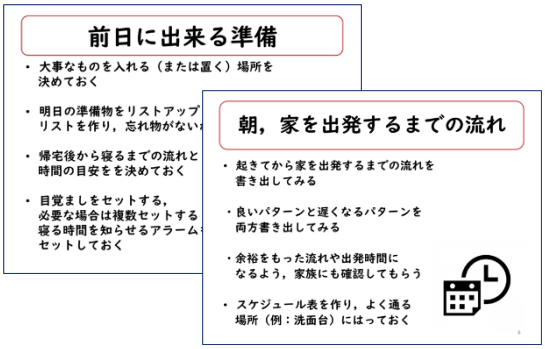
＊場面が想定できない場合は「○○の時はどうしてる？」など、
　思い出せるように助言する
＊現状と違っていても修正を求めるコメントは控え、本人の思う通りに
　書けるようにする
＊自己評価の理由を尋ね、意図を確認するとよい（本人の考え方の特徴を知る）

②

2．講義

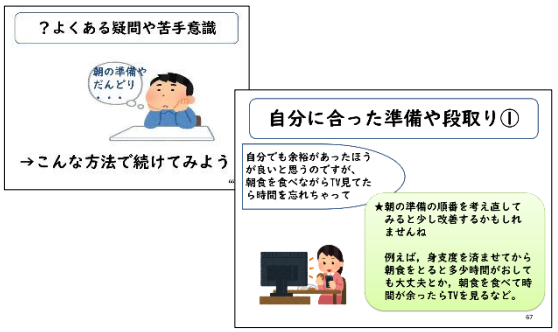


③



④

その後、「自分なりの対処法」について



⑤

講義後、ﾜｰｸｼｰﾄ#1　記入

目的：生徒の講義内容の理解状況を把握する
　　また、理解を深める

2．講義の中に出てきたことを書いてみよう　（資料から抜き出して書いても OK!）

Q1 朝の準備や段取りが習慣化すると、どんないいことがありますか？
　印象に残ったことを２つ書いてみましょう。

①＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

②＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

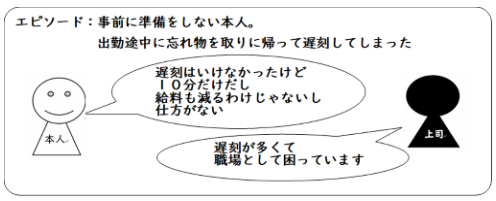
Q2 準備の工夫の例について、＿＿＿（下線）に入ることばを書きましょう。

・大事なものを入れる（または置く）＿①＿を決めておく
・＿②＿をつくり、忘れものがないように点検する
・帰宅後から寝るまで、また起きてから出発するまでの＿③＿と時間の＿④＿を決めておく

答え ①＿＿＿＿＿＿　②＿＿＿＿＿＿　③＿＿＿＿＿＿　④＿＿＿＿＿＿

⑥

3．軽演劇の視聴　場面『出勤の際に』
4．ワーク　※ﾜｰｸｼｰﾄ#2使用



Q1：登場人物「本人」の発言や行動で、気になったことは何ですか？
Q2：登場人物「本人」が、今後気を付けた方が良いと思うことは何ですが（選択式）
Q3：「出かける前にしていること」で、今、自分が気を付けていることがありますか？
Q4：今後、自分が取り入れてみたい工夫がありますか？

⑦

5．「まとめ」記入
「今日の振り返り」記入

目的：今後の取り組みについて明確にし、生徒自身も周囲も
　　意識して取り組むことができるようにする
　　また、生徒のこの授業の捉え方を把握し、必要に応じてフォローする

今後、自分が、朝余裕をもって出発するために、

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿をする。

今日の振り返り

◎ or ○ or △ ↓		自由記述	（わかったこと・できたこと・気づいたこと・感想）
授業の納得度			
目標達成度			
主体的な参加度			

⑧

Ⅱ　個別のニーズとプログラム内容

1　目標設定や指導内容の検討について

＜高等学校における指導内容として展開していくために＞

先に述べたように、中学校で特別支援学級に在籍していた生徒が、通級指導を行う高等学校へ進学するケースが想定されます。そこで本冊子では、**高等学校における指導内容として本プログラムを展開する際に、通級指導の枠組みでの活用も想定**しています。高等学校における通級指導においては、「障害による学習上又は生活上の困難を改善し、又は克服することを目的とする指導」とされ、指導内容は**「各教科等のようにあらかじめ学習する内容が決まっているものではなく、生徒一人一人の実態を把握した上で、個々の教育的ニーズに応じて検討し決定されること」**とされています。また、通級指導を行う際には、「特別支援学校学習指導要領自立活動編を参考として実施すること」とされ、[9] **「内容が先にあるのではなく、実態から指導内容が決定することを押さえておく必要がある」**ことも強調されています。[10]

＜放課後等デイサービス事業所における発達支援として展開していくために＞

放課後等デイサービス事業所における発達支援においては、障害児支援の基本理念として「障害の特性を踏まえたニーズに応じた発達支援の提供」が必要とされています。また、放課後等デイサービスの目標のひとつとして、「生きる力の育成とこどもの育ちの充実」が掲げられており、**「一人一人の人間性の成長にしっかりと目を向け、単に知識やスキルを身につけるのではなく、生きる力や自立心を育てていく」**ことなどが述べられています。つまり、**教育領域と同様に、知識やスキルが先にあるのではなく、個々の成長や障害特性を踏まえたニーズから支援を展開していく必要性**が強調されています。[4]

そこで、個別のニーズとして**「学校場面・家庭生活で課題を感じていること（例）」**と、**「進路検討段階で予想される困難さ（例）」**や**「就労上で予想される困難さ（例）」**をあげた上で、本プログラムの各コマの内容を**「自己についての多面的な理解に関するニーズ」「人間関係形成や課題対応に関するニーズ」「自分に必要となるサポートの理解に関するニーズ」**に分けて次ページ以降に紹介しています。

また、高等学校における通級指導をはじめとしたカリキュラムや放課後等デイサービス事業所における発達支援に少しでも取り入れていただきやすくなるように、教育・福祉双方の領域の支援内容との関連付けについても示しています。具体的には、**特別支援学校における自立活動である、「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の6区分 27 項目との関連付けの例**を示しています。**各コマの進め方について「指導案」を作成していること**も、教育領域の指導・支援内容に活かしていただきやすいよう工夫をしたことの 1 つです。また、**放課後等デイサービス事業所における本人支援の 5 領域である「健康・生活」「運動・感覚」「認知・行動」「言語・コミュニケーション」「人間関係・社会性」との関連付けの例**も示しています。

---

[9] 国立特別支援教育総合研究所（2020）：高等学校教員のための「通級による指導」ガイドブック おさえておきたいQ＆A. https://www.nise.go.jp/nc/cabinets/cabinet_files/download/1079/d7f998d2d7022ddb169848956db11b2d?frame_id=1235（2025/01/15 参照）.

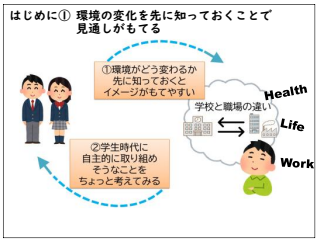
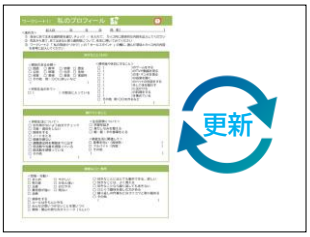
[10] 岡山県教育庁特別支援教育課（2020）：高等学校における通級による指導スタートブック. https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/650291_5622186_misc.pdf（2025/01/15 参照）.

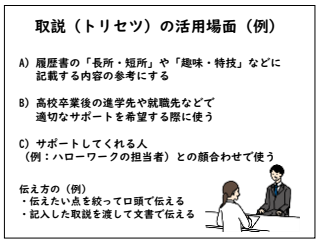
2 自己についての多面的な理解に関するニーズ【障害特性・行動の特性】

（1） 個別のニーズ

学校場面・家庭生活で課題を感じていること（例）	進路検討段階で予想される困難さ（例）
●卒業後の進路のイメージが持ちにくい様子や意欲が低い様子が見受けられる ●将来を考えることに抵抗感や不安を感じている様子が見受けられる ●将来なりたい自分や就きたい職業と現状とのギャップが大きいように見受けられる	●就職活動時期や卒業年度になっても進路希望や意向が定まりにくい ●自身の得手不得手や特性などを踏まえた進路検討が難しい ●進学・就労のいずれにおいても、予防的に相談窓口や何らかのサポートを利用する行動につながりにくい

（2） 対応するプログラム内容

「働くことを知る・学ぶプログラム」で取り扱う内容	【教育】自立活動の6区分 27 項目	【福祉】本人支援の 5 領域とねらい
<u>プログラム① 学校と職場の違いを知ろう</u> ● 「学校と職場の違い」をいくつか例示し、環境の変化を先に知っておくことで見通しがもてることを話題にあげ、プログラムで何を学ぶかの導入とする。  ● 仕事そのものを進める知識や技術よりも、継続して働くための「仕事の支えとなるチカラ」や、進学を希望する生徒も含め「自分の姿（特徴）にも目を向けるきっかけにする」ことに焦点をあてる。 ● ワークシート記入で、どんな職業につきたいか、何のために働くのか等、生徒自身が「将来なりたい自分」を考えるきっかけとする。また、「プロフィールシート」にある得意・不得意などに関する項目にチェックを付け、11時間目に再度記入することで自己理解を深めていく材料とする。	3 人間関係の形成 (1)他者とのかかわりの基礎に関すること (2)他者の意図や感情の理解に関すること (4)集団への参加の基礎に関すること	(ウ) 認知・行動 ・対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得 (オ) 人間関係・社会性 ・自己の理解と行動の調整
<u>プログラム⑪ プロフィールシートに記入してみよう</u> ●「自分の特徴を知る」ことをテーマにおき、プログラム①で記入した「プロフィールシート」を更新する。例えば、学校生活、行事、インターンシップや実習、アルバイト経験など、1年間色々と経験したことをもとに振り返りながら、自分の良い面・苦手な面について整理する。  ●進め方として、支援者や同じクラス・グループのメンバー等と一緒に振り返ることで、自己評価に加えて他者評価も交えながら行う。 ●留意点として、自分の特徴に向き合うことに抵抗を感じる人がいるため、プロフィールシート 1 ページ目の「良い面」から始めることや、「良い面」の捉え方として、特別に秀でている面という意味ではなく、『続けていること』や『普段、自分でしていること』を一緒に探してみたり、周囲からフィードバックしたりするようにして進める。	1 健康の保持 (4)障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること 3 人間関係の形成 (3)自己の理解と行動の調整に関すること 4 環境の把握 (2)感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること	(ウ) 認知・行動 ・対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得 (オ) 人間関係・社会性 ・自己の理解と行動の調整

プログラム⑫　自分の取説「トリセツ」を作ろう ●学校と職場の違いとして、「先生以外は同世代という学校とは違い、職場には色々な年齢や立場の人がいること」「上司や同僚とコミュニケーションをとる場面は、どの職場でもあること」をあげながら、「トリセツ」を新しい環境で自分のことを知ってもらいたい時に活用できるツールとして紹介。  ●活用場面の例は幅広く設定しており、A）履歴書の「長所・短所」や「趣味・特技」などに記載する内容の参考にする場合、B）高校卒業後の進学先や就職先などで適切なサポートを希望する際に使う場合、C）サポートしてくれる人（例：ハローワークの担当者）との顔合わせで使う場合などをあげている。 ●『プロフィールシート』の項目と『トリセツシート』の項目は対応しており、転記したり加筆したりしながら、自分の特徴を整理していく。	**1　健康の保持** （4）障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること **3　人間関係の形成** （3）自己の理解と行動の調整に関すること **4　環境の把握** （2）感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること	**（ウ）認知・行動** ・対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得 **（オ）人間関係・社会性** ・自己の理解と行動の調整

（3）進め方と支援のポイント　※各コマにある指導案より

ポイント

＜ワークシートの用い方と支援のポイント＞

プログラム①「学校や職場の違いを知ろう」のワークシート＃1について

A. 学校と職場の違いについて、（　　）に入ることばを書きましょう
B. 将来、どんな職業に就きたいと思っていますか？　その理由は？　補助資料：「職種一覧表」
C. 何のために働きますか？　あてはまるものに〇をつけましょう！（複数可）
D. インターンシップの経験はありますか？
E. アルバイトの経験はありますか？

★生徒の希望や経験を聞き取る（情報収集）
★希望や思い、経験の記入項目のため、意見は挟まないように注意する

プログラム①⑪　プロフィールシートについて

P1：好きなこと（もの）/続けていること/得意なこと・長所
P2：苦手なこと・場面　/戸惑ったときのサイン・疲れや不安のサイン/落ち着くこと・落ち着くもの・休憩時間の過ごし方

＜進め方＞　**※プログラム①でまず記入したものを、プログラム⑪で更新する方式**

①　自分にあてはまる選択肢を選び、カッコ内に具体的な内容を記入
②　支援者や他の生徒からエピソードを聞き出す
　例：〇〇の時に、こんなことをしてくれて親切だと思ったことがある
　例：〇〇を最後まで頑張っていた　等
③エピソードで出たことに当てはまるところを追加記入

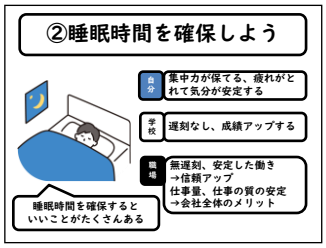
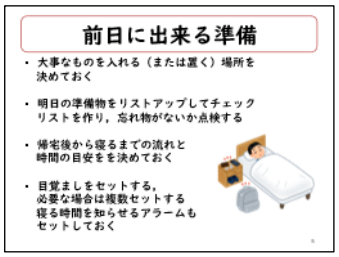
★自分の特徴に向き合うことに抵抗を感じる人がいるため、1 ページ目の「良い面」から始める
★「好きなもの」は比較的書きやすいが、「続けていること」「得意なこと・長所」は、✓を入れる基準が厳しくなりがちなため、ハードルを低めに、できていることをフィードバックする
★成功体験や振り返り体験の積み重ねがあってはじめて冷静に客観的に振り返ることができる。そのため、プロフィールシート更新までに、9 時間目までのプログラム（他の活動や体験でももちろん良い）に参加し、知識を得る・今の自分を振り返る・自分なりの対処法をやってみる、また作業体験で成功体験を積んでおくことが大切である。※自尊感情が低い場合は、特に慎重に取り扱うこと

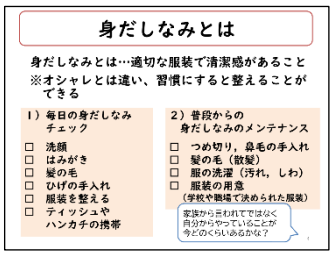
3 自己管理能力に関するニーズ 【体調管理・生活環境の調整】

（1） 個別のニーズ

学校場面・家庭生活で課題を感じていること（例）	就労上で予想される困難さ（例）
●週末に夜型の生活が強まり、平日に起床時間が遅くなり朝食をとる時間がなく、遅刻してしまうこともある ●眠気や空腹等により、授業中にぼーっとして居眠りが多く見られる ●忘れ物や課題提出の期限を過ぎてしまうことが多い ●身だしなみが整っていないことに気づきにくい	●遅刻や欠勤が続くと、周囲に負担が生じ、職場内の人間関係に影響が出る場合がある ●焦って通勤することで、忘れ物やエネルギーを消耗してしまう恐れがある ●睡眠不足により眠気やミスが生じやすくなる ●業種に合わせた身だしなみや衛生管理が難しい場合、職種選択の幅が制限される場合がある

（2） 対応するプログラム内容

「働くことを知る・学ぶプログラム」で取り扱う内容	【教育】自立活動の6区分 27 項目	【福祉】本人支援の5 領域とねらい
<u>プログラム② 食事と睡眠の大切さを知ろう</u> ●睡眠時間が確保できている場合とそうでない場合、また朝食を摂っている場合とそうでない場合の学校生活・職場それぞれでのメリット・デメリットを示し、睡眠時間の確保と朝食を摂ることの大切さを知る。  ●チェックリストをつけて自分の現状を確認し、睡眠習慣や食生活の改善について、自分なりの対処方法を考える。 ●寸劇動画『寝る前の過ごし方』 夜更かしをして翌日の仕事がはかどらない場面	1 健康の保持 (1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること (5)健康状態の維持・改善に関すること	(ア) 健康・生活 ・生活におけるマネジメントスキルの育成 (イ)運動・感覚 ・感覚の特性への対応 (ウ) 認知・行動 ・対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得
<u>プログラム③ 朝の準備や段取りを考えよう</u> ●朝の準備ができている場合とそうでない場合の、学校生活・会社それぞれでのメリット・デメリットを示し、朝の準備や段取りが整っていることの大切さを知る。  ●チェックリストをつけて自分の現状を確認し、前日に出来る準備や家を出発するまでの流れについて、自分なりの対処法を考える。 ●寸劇動画『出勤の際に』 前日何もせず寝てしまい、翌日慌てて家を出たため忘れてしまったスマホを取りに帰り、遅刻した場面	1 健康の保持 (1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること (4)障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること	ア) 健康・生活 ・生活におけるマネジメントスキルの育成 (イ)運動・感覚 ・感覚の特性への対応 (ウ) 認知・行動 ・対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得

プログラム④　身だしなみを整えることの重要性を知ろう ●身だしなみが整っている場合とそうでない場合の、学校生活・職場それぞれでのメリット・デメリットを示し、身だしなみを整えることの大切さを知る。 ●チェックリストをつけて自分の現状を確認し、自分なりの対処法として、毎日整えるもの、月に数回整えるものについて、自分なりの対処方法を考える。 ●寸劇動画『身だしなみの整え方』 出勤時に、身だしなみが整っていない場面  	**3 人間関係の形成** (3)自己の理解と行動の調整に関すること (4) 集団への参加の基礎に関すること	**ア）健康・生活** ・生活におけるマネジメントスキルの育成 **(イ)運動・感覚** ・感覚の特性への対応 **(ウ) 認知・行動** ・対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得

(3)進め方と支援のポイント　※各コマにある指導案より

ポイント

＜講義の進め方と支援のポイント＞

①　ワークシート内の「チェックリスト」に記入（3 段階で自己評価）

※プログラム③「朝の準備や段取りを考えよう」の場合

・ 自分に必要な物の管理ができているか（例：定期券、サイフ、鍵など）

・ 授業開始前に、登校しているか（始業時間/家を出る時間/学校到着時間）

・ 提出物は期限を守って出せているか

★生徒の現状を把握・共有することが目的。現状と違っていても修正を求めるコメントは控え、本人の思う通りに書けるようにする

★自己評価の理由を尋ね、意図を確認するとよい（本人の考え方の特徴を知る）

②　講義

講義後、ワークシート内の「講義の中で出てきたことを書いてみよう」に記入

★内容を膨らませたり分かりやすくしたりするため参考資料の追加もよい。※所要時間も延ばすこと

③　軽演劇視聴『出勤の際に』 ※プログラム③「朝の準備や段取りを考えよう」の場合

視聴後、ワークシート内の以下の項目について記入

Q1　登場人物「本人」の発言や行動で気になったこと

Q2　登場人物「本人」が今後気を付けたほうが良いこと（選択式）

Q3　「出かける前にしていること」で、今自分が気を付けていること

Q4　今後、自分が取り入れてみたい工夫

★グループで行う場合は、ワークシートに書いた内容を読み上げる形での発表も可とすることで発表が苦手な生徒もワークに参加しやすくする

★発表の内容は生徒に見えるように黒板等に書き留め、視覚的に確認できるようにする

★生徒の経験や現在の対処法を把握し、一緒に考え、生徒が取り組めそうなことを見つけていく

④　まとめと今日の振り返り　ワークシート記入

「今後、自分が、朝余裕をもって出発するために（※プログラム③の場合）」に続く形で記入

「授業の納得度」、「目標達成度」、「主体的な参加度」を 3 段階で自己評価

★講義内容の理解状況を把握し、必要な場合は個別にフォローする

★生徒自身の捉え方を把握する　**★自己評価が低い場合など、本授業以外でもフォローする**

★学校生活等の日常で、周囲も意識して関わる資料とする

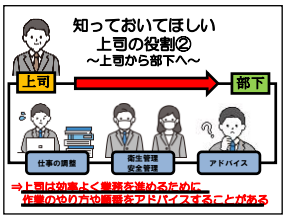
4　人間関係形成や課題対応に関するニーズ【コミュニケーション、援助要請】

（1）個別のニーズ

学校場面・家庭生活で課題を感じていること（例）	就労上・進学先で予想される困難さ（例）
●話したいこと、困っていること、自分の気持ちを伝えることが苦手 ●困っている状況に本人自身が気づきにくい場合や、何でも自分で解決すべきとの思いがある場合などから、援助要請する行動が見られにくく、 学習に遅れが生じる場合がある ●周囲からの言葉かけに敏感で、ストレスをため込みやすい	●相談するタイミングが分からず、困っている状況が続き、業務に支障が出る ●相談役となる人や相談窓口が分かっていても、本人からつながることが難しい ●困っている状況が続き、本人のメンタル面に不調がでる

（2）対応するプログラム内容

「働くことを知る・学ぶプログラム」で取り扱う内容	【教育】自立活動の6区分27項目	【福祉】本人支援の5領域とねらい
<u>プログラム⑤　報告・連絡・相談について知ろう</u> ●報・連・相について、社会人としてのマナーだけではなく上司や同僚と一緒に働く上で、その都度行っていくものであり、本人にとってもメリットのある身近なものであることを知る。また、学校と職場の違いとして、理解しているかどうか確認してもらいやすい先生と生徒の関係とは違い、上司も自分の仕事があり、分からないことや時間内に終わりそうにない場合などは、自分から相談することが大切となることも解説する。 ●声をかけるタイミングや、何をどこまで報告するか迷うなど、報・連・相にありがちな場面状況や苦手意識などを取り上げる。クッション言葉の例や使うタイミング、作業の序盤に「これで合っていますか？」と確認する方法など、自分が安心して作業を進めていくための対処法を学び、自分なりの対処方法を考える。 ●寸劇動画『質問するタイミング』 困って質問をしようとするが、忙しい上司を見て戸惑っている場面	6 コミュニケーション (4)コミュニケーション手段の選択と活用に関すること (5)状況に応じたコミュニケーションに関すること	(ウ) 認知・行動 ・対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得 (エ)言語・コミュニケーション ・状況に応じたコミュニケーション (オ) 人間関係・ 社会性 ・他者との関わり（人間関係）の形成
<u>プログラム⑥　挨拶と報告のマナーを知ろう</u> ●ごく身近なテーマである挨拶について、チェックリストをつけて自分の現状を確認する。新しい環境や人間関係に入った状況を想定して、望ましい身体の動き、声の大きさ、場面に応じた定型句などを学び、今後自分が挨拶をする時に気を付けることを考える。 ●どれぐらいの範囲の人に挨拶するか迷うこと、大きな声で相手の目を見て挨拶することの苦手意識、挨拶を返してくれなかったらどうしたらいいかと考えてしまうことなどに対し、代わりとなる無理なくできそうな振る舞いや考え方などについても学び、自分なりの対処方法を考える。 ●寸劇動画『挨拶と報告をするときは』 上司から挨拶されても返さず、報告の時も指示を待たずにその場を離れる場面	6 コミュニケーション (4)コミュニケーション手段の選択と活用に関すること (5)状況に応じたコミュニケーションに関すること	(ウ) 認知・行動 ・対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得 (エ)言語・コミュニケーション ・状況に応じたコミュニケーション (オ) 人間関係・ 社会性 ・他者との関わり（人間関係）の形成

プログラム⑦　上司の役割を知ろう ●上司には、それぞれの社員が担当している仕事がどれぐらい進んでいるかの把握や、効率よく業務を進めるための修正やアドバイスをする役割があることを知る。  ●上司から指示を受けた時に、声かけを「注意された」と間違って受け取って落ち込んだり、「やり直しをしなくてはいけなくなった」とイライラしたりする場合があることを取り上げる。自分の捉え方の特徴を考えるとともに、捉え方やリフレッシュ方法、相談などの対処方法について学び、自分なりの対処方法も考える。 ●ワークシートで（第1回で記入したプロフィールシートも見ながら）、普段の自分の受け止め方を振り返り、切り替えの手段など対処法についても考える。 ●寸劇動画『作業中の指示』 上司の助言を注意と勘違いする場面	**2　心理的な安定** (1) 情緒の安定に関すること (2) 状況の理解と変化への対応に関すること	**(ウ) 認知・行動** ・対象や外部環境の適切な認知と適切な行動の習得 **(エ) 言語・コミュニケーション** ・状況に応じたコミュニケーション **(オ) 人間関係・ 社会性** ・他者との関わり（人間関係）の形成

(3)進め方と支援のポイント　※各コマにある指導案より

ポイント

＜講義の進め方と支援のポイント＞

① **ワークシート内の「チェックリスト」に記入**（3 段階で自己評価）
※プログラム⑤「報告・連絡・相談について知ろう」の場合
・ 相談できる人がいるか（家族/友達/先生/その他）
★生徒の現状を把握・共有することが目的。現状と違っていても修正を求めるコメントは控え、本人の思う通りに書けるようにする
★自己評価の理由を尋ね、意図を確認するとよい（本人の考え方の特徴を知る）

② **講義**
講義後、ワークシート内の「講義の中で出てきたことを書いてみよう」に記入
★内容を膨らませたり分かりやすくしたりするため参考資料の追加もよい。※所要時間も伸ばすこと

③ **軽演劇視聴『質問をするタイミング』**　※プログラム⑤「報告・連絡・相談について知ろう」の場合
視聴後、ワークシート内の以下の項目について記入
Q1　登場人物「本人」の発言や行動で気になったこと
Q2　登場人物「本人」が今後気を付けたほうが良いこと（選択式）
Q3　「質問をする時」に、今自分が気を付けていること
Q4　今後、自分が取り入れてみたい工夫
★生徒の経験や現在の対処法を把握し、一緒に考え、生徒が取り組めそうなことを見つけていく
★グループで行う場合は、ワークシートに書いた内容を読み上げる形での発表も可とすることで発表が苦手な生徒もワークに参加しやすくする
★発表の内容は生徒に見えるように黒板等に書き留め、視覚的に確認できるようにする

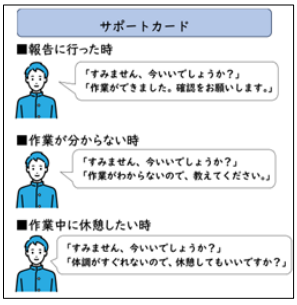
④ **まとめと今日の振り返り　ワークシート記入**
「今後、自分が報告・連絡・相談するときは（※プログラム⑤の場合）」に続く形で記入
「授業の納得度」、「目標達成度」、「主体的な参加度」を 3 段階で自己評価
★講義内容の理解状況を把握し、必要な場合は個別にフォローする
★生徒自身の捉え方を把握する　★自己評価が低い場合等、本授業以外でもフォローする
★学校生活等の日常で、周囲も意識して関わる資料とする

5 自分に必要となるサポートの理解に関するニーズ【作業体験と必要なサポート】

（1） 個別のニーズ

学校場面・家庭生活で課題を感じていること（例）	進路検討段階で予想される困難さ（例）
●自分の得意不得意や自分に合う職種や作業内容をイメージしたり、考えたりすることが難しい ●自分のことをモニターする、自分の適性を考えること自体が苦手 ●実習やインターンシップへの不安が強い場合やアルバイト経験を失敗経験として受け止めている場合がある	●自身の得手不得手や特性などを踏まえた進路検討が難しい ●自分にとって取り組みやすい環境やサポートを踏まえた進路検討が難しい ●職場側に伝える合理的配慮の整理ができていなかったり、周囲に質問したり相談したりする行動をとることができず事態が悪化する場合がある

（2） 対応するプログラム内容

「働くことを知る・学ぶプログラム」で取り扱う内容	【教育】自立活動の6区分 27 項目	【福祉】本人支援の5 領域とねらい
<u>プログラム⑧ 作業体験 1 事務作業（体験し、振り返る）</u> ●身近な材料でできる作業であり、学習と違って手を動かしながら、繰り返し正確に作業を進めていくことが求められる模擬作業の 1 つとして封入作業を例にあげたもの。スペースに余裕がある場合は上司役がいる作業台に材料を取りに行き、分からないことがあれば近くのサポーター役に質問する環境を作る。他のコマで学んだクッション言葉を用いて報告や質問などを実際にやってみて、成功体験を得る機会とする。 ●作業理解の手段として、複数の手がかりやサポート（口頭指示／実演／手順書／サポーター）を用意しておく。最初から手厚すぎる支援を行わず、必要に応じて手がかりやサポートを試してみる経験ができるようにする。 ●ワークシートによる作業体験後の振り返りでは、作業ができたかどうかに加えて、自分にとって役立ったサポートは何かについてもチェックしながら、自分の実力が出しやすい環境について考える。 <u>プログラム⑨ 作業体験 2 図書館作業（体験し、振り返る）</u> ●机上で行う事務作業に比べ、移動を伴う作業であり、色々な所に目をやる必要がある模擬作業の 1 つとして、本の抜き取り・返却作業を例にあげたもの。 ●他のコマで学んだクッション言葉を用いて報告や質問などを実際やってみることや、複数の手がかりやサポートを用意しておくこと、ワークシートによる作業体験後の振り返りについては、上記のプログラム⑧と同様。  ●報告や質問をした経験が少なかったり、コミュニケーションに苦手意識がある場合は、図にあるようなサポートカードにあるセリフを参考にしたり、その場でカードを見ながら言ってみることも OK。	**2 心理的な安定** (3)障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること **3 人間関係の形成** (3)自己の理解と行動の調整に関すること **5 身体の動き** (5)作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	**(エ)言語・コミュニケーション** ・状況に応じたコミュニケーション **(オ)人間関係・ 社会性** ・自己の理解と行動の調整

プログラム⑩　これまでの経験を振り返ろう ●ワークシートで、これまでの作業体験、アルバイト、実習、学校の授業や部活動、家事の手伝い、趣味の活動などを振り返り、得意なこと・苦手なことの理解を深める。 ●職種一覧表を用いて、各職種の表面的なイメージではなく、仕事内容、求められること、職場環境の特徴などを知る。その上で、現段階で希望する職種や希望しない職種を考える。 ●現状で難しそうな職種を本人が希望する場合は、就職に向けてつけたい力やそのために取り組むことをワークシートで考える。反対に本人自身が難しい職種として判断した理由に、自身の苦手さを具体的にあげることができている場合は、大切な気づきとしてフィードバックする。	**2　心理的な安定** （3）障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること **3　人間関係の形成** （3）自己の理解と行動の調整に関すること **4　環境の把握** （2）感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること	（オ） **人間関係・　社会性** ・自己の理解と行動の調整

（3）進め方と支援のポイント　※各コマにある指導案より

ポイント

＜作業体験の進め方と支援のポイント＞

① 全体に向けて口頭や実演で作業指示を行う
★取り組みながら必要な支援を足していくことで自分に必要な支援を実感することをねらうため、最初から手厚すぎる支援を行わない

② まずは少なめの作業セットでやってもらう　**★全体指示を理解しているか個別にチェックする**

③ 正しくできていればそのまま次のセットに取り組むように促す
ミスがあれば、修正を伝え、再度取り組むように促す
★量をこなしてから訂正するより、早めに訂正を入れることで失敗感を少なくする
★躊躇が見られたらサポーター役のスタッフが声をかけて困っていることを確認し、場合によっては報告役のスタッフに質問に行くよう促すなど、自分からヘルプを出す練習になるよう関わる
★手順を再確認した方が良さそうな場合は「手順書」、報告に躊躇があるようなら「サポートカード」など、生徒の困り感に合わせてサポートツールを使ってみるよう促す

④ 作業を一定時間繰り返す
★休憩をはさむ長めの作業時間バージョンも行なってみて、どのくらいの時間で集中が途切れるのか、また休憩により復活するのかを体験することや、自分なりの休憩時間の過ごし方を練習　する機会とする

＜振り返りの進め方と支援のポイント＞

①　ワークシート『自己評価表』に記入（できた/まあまあできた/努力したい）
・決められた手順で取り組めたか
・作業に必要なコミュニケーションができたか（挨拶／報告／質問）
・役立ったもの（実演／手順書／サポーター／サポートカード／その他）

②　『自己理解表』に記入
・実力が出しにくい場面　・実力が出しやすい場面
その日の設定で、わかりやすかった指示、集中できる環境等を振り返る
例：隣の人の作業のペースが気になって焦った
例：1回目よりも2回目の方が上手くできた
例：実演がいちばん分かりやすかった。反対に手順書はイメージしづらかった
例：封入作業で足りないものがあって、どう伝えたらいいか迷っていたが、サポーターが声をかけてくれて助かった。
例：報告する時にサポートカードに書いてあるセリフがあって安心できた

★どのように評価したとしても、良かったところを見つけてフィードバックする（例：ミスを指摘されても気を取り直して続けて取り組んだ）
★作業中の様子をよく観察しておき、「こんな場面があったよ」と一緒にエピソードを振り返る

Ⅲ　プログラムを活用した教育・福祉領域の機関への調査より

1 調査の枠組

本プログラムを活用した教育･福祉領域の 6 機関の担当者の方に、導入のプロセスについてアンケート及びインタビュー調査の機会をいただきました。調査の枠組は以下のとおりです。

＜アンケート内容＞
機関の基礎情報、プログラム活用の目的、実施の枠組、対象者の概要

＜インタビュー内容＞
（1） 導入前の課題やニーズ
・「働くこと」や「働くことに向けた準備」に関する支援ニーズ
・ 既存のプログラムやカリキュラムの課題
（2） 導入後の反応や変化と機関への影響
・ 本人たちの反応や変化
・ 機関内への影響

＜分析方法＞
インタビュー記録➡分節に分けてコードを付与➡共通する意味ごとにサブグループとグループに整理

実施機関である 6 機関の基礎情報は、表1のとおりです。実施の枠組については、教育領域の実施機関 A～D では、学校種別や規定のカリキュラムに合わせて、関連のある科目や時間を活用しながらの実施でした。福祉領域の実施機関 E、F では、個別支援や小集団活動といった事業所の運営スタイルに合わせての実施でした。実施形態については、集団･クラス単位･個別に分かれていますが、複数スタッフによる少人数を対象とした指導･支援が主でした。

表1 実施機関の基礎情報

実施機関		担当者	実施の枠組	実施形態	実施期間
A	普通科昼間定時制課程（単位制）通級指導	通級担当	通級指導（週 2 時間）	・集団（1～5 人）と個別を併用 ・複数スタッフ（2 人）	2 年
B	普通科通信制課程（単位制）通学コース	学級担任	学校設定科目「チャレンジ講座」（週 2 時間）とロングホームルーム	・クラス単位(10～15 名) ・複数スタッフ（2 人）	1 年
C	普通科夜間定時制課程	学級担任	「総合的な探究の時間」（週 1 時間）	・クラス単位（5～15 名） ・複数スタッフ（2 人）	2 年
D	特別支援学校高等部肢体不自由児部門	進路指導担当	学校設定教科「産業社会と人間」（年間 18 時間）	・集団（1～5 人／複数学年）と個別を併用 ・複数スタッフ(2～3 人)	4 年
E	放課後等デイサービス事業所	高校生担当	個別支援（週１）	・個別（1 対 1）と一部集団（2～3 人）	2 年
F	放課後等デイサービス事業所	就労準備担当	小集団活動（月１）	・集団（10 名程度／複数学年） ・スタッフ 1 名	1 年

表2 プログラム対象者の概要（2023年度の１年間で実施した対象者について）

活用機関		年齢／発達障害／知的障害	進路希望	アルバイト経験やインターンシップ
A	普通科昼間定時制課程（単位制）通級指導	・高校 2 年生、高校 3 年生 ・発達障害診断の有無に限定しない生徒（診断ありの生徒含む） ・軽度知的障害がある生徒も含む	・就労（一般）を希望 ・就労（障害者雇用）を希望 ・障害福祉・職業リハビリテーションの就労支援機関利用を予定 ・進学希望	・アルバイト経験ありの生徒は 4 割程度 ・インターンシップは 3 年時に 5 日間あり
B	普通科通信制課程（単位制）通学コース	・高校 2 年生 ・発達障害診断の有無に限定しない生徒（診断ありの生徒含む） ・知的障害がない生徒のみ（疑いはあるが検査は受けていない生徒を含む）	・就労（一般）を希望 ・就労（障害者雇用）を希望 ・進学希望 ・具体的な進路希望がまだない状態	・アルバイト経験ありの生徒は 5 割程度
C	普通科夜間定時制課程	・高校 1 年生、高校 3 年生、高校 4 年生 ※高校 2 年生は前年度に実施済み ・発達障害診断の有無に限定しない生徒（診断ありの生徒含む） ・軽度知的障害がある生徒も含む	・就労（一般）を希望 ・進学希望 ・具体的な進路希望がまだない状態	・アルバイト経験ありの生徒は 7 割半ば程度 ・インターンシップは 3 年時に 3 日間あり
D	特別支援学校高等部肢体不自由児部門	・高校 1 年生、高校 2 年生、高校 3 年生 ・発達障害診断の有無に限定しない生徒（診断ありの生徒含む） ・軽度知的障害がある生徒も含む	・就労（障害者雇用）を希望 ・障害福祉・職業リハビリテーションの就労支援機関利用を予定 ・進学希望	・アルバイト経験なしの生徒のみ ・2 年時に校内実習 3 年時に校外実習あり
E	放課後等デイサービス事業所	・高校 1 年生、高校 2 年生、高校 3 年生 ・発達障害の診断ありの生徒のみ ・知的障害がない生徒のみ（疑いはあるが検査は受けていない生徒を含む）	・就労（一般）を希望 ・進学希望	・アルバイト経験ありの生徒は全体の 3 割程度
F	放課後等デイサービス事業所	・中学生～高校 3 年生（自己理解に関するテーマのみ小学校高学年も含む） ・発達障害の診断ありの生徒のみ ・軽度知的障害がある生徒も含む	・就労（一般）を希望 ・就労（障害者雇用）を希望 ・障害福祉・職業リハビリテーションの就労支援機関利用を予定 ・具体的な進路希望がまだない状態	・アルバイト経験ありの生徒は全体の 1 割程度

プログラム対象者の概要については、表2のとおりです。教育領域と福祉領域とも主に高校1年生から 3 年生までを対象に、教育領域では発達障害の診断の有無に限定せずに実施されていました。進路希望については、就労（一般）や進学を希望する生徒から、就労（障害者雇用）の希望や障害福祉・職業リハビリテーションの就労支援機関利用を予定する生徒、そして、具体的な進路希望がまだない生徒まで、幅広い進路希望のニーズがありました。また、アルバイトに取り組む生徒などの割合も一定数見られるなど、学業を継続しながら働く経験を積む生徒と、アルバイト経験がなく就労のイメージがない生徒や具体的な進路希望がまだない生徒まで、生徒の幅広い状態像に合わせた個別の支援ニーズがあることが分かりました。

それぞれの機関における活用例については、「Ⅳ 教育・福祉領域における活用例」に掲載しています。色々な調整や工夫、課題点など貴重な実践を教えていただきましたので、ぜひご参照ください。

2 導入前の課題やニーズ

(1)「働くこと」や「働くことに向けた準備」に関する支援ニーズ

「働くこと」や「働くことに向けた準備」に関して、教育・福祉領域の 6 機関の担当者から複数挙がった意見を集約した結果、【本人たちに関する支援ニーズ】【卒業後に向けた準備として学んでほしい内容や経験してほしいこと】【家族に関する支援ニーズ】【支援者自身が感じている不安】という4つのグループと、①～⑬のサブグループに分けることができました(図1)。以下に、その内容を示します。

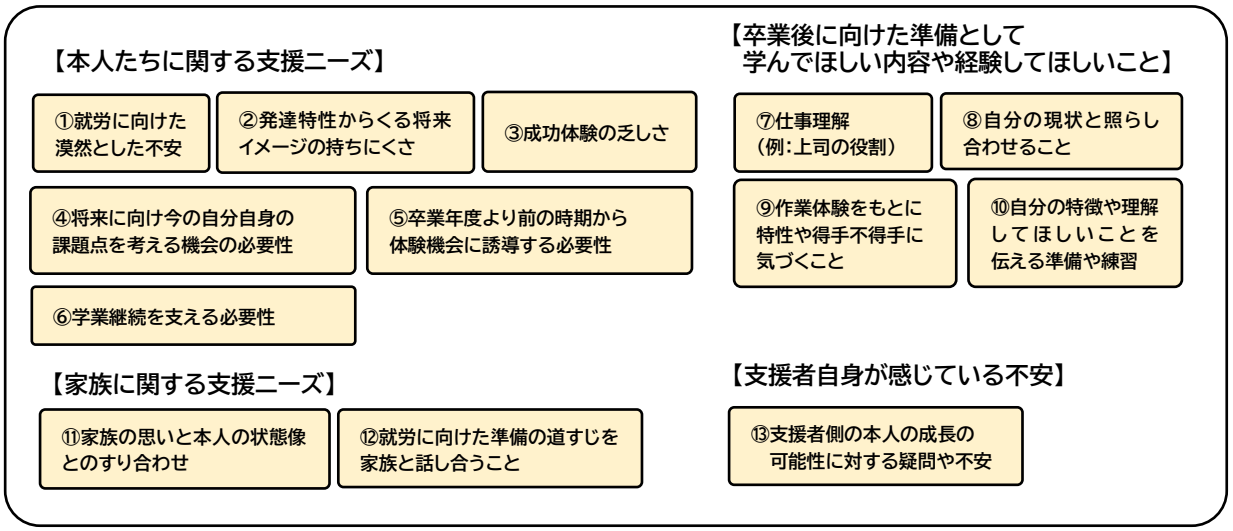


図1 プログラム実施機関の担当者があげた支援ニーズ

【本人たちに関する支援ニーズ】

プログラム実施機関の担当者からは、生徒たちが示す『**①就労に向けた漠然とした不安**』に加えて、**将来の展望やイメージの持ちにくさ、自分の適性の分かりづらさが見受けられる背景に『②発達特性からくる将来イメージの持ちにくさ』という視点で捉えている**との意見があがっていました。そのため、**現状の生活で課題となっていることがあるかどうかを考えたり、自分の現状と照らし合わせたりするための機会として『④将来に向け今の自分自身の課題点を考える機会の必要性』**が指摘されていました。また、**人間関係やアルバイトでの失敗経験など『③成功体験の乏しさ』が見受けられる生徒への支援ニーズ**にも言及しており、コミュニケーションの練習機会や作業体験の機会など『**⑤卒業年度より前の時期から体験機会に誘導する必要性**』が述べられていました。

また、様々な状況の生徒がいることから、**安定して学校に通うことや学校生活の安定をサポートすることなど、『⑥学業継続を支える必要性』**もあげられていました。

【卒業後に向けた準備として学んでほしい内容や経験してほしいこと】
【支援者自身が感じている不安】

まずは、職業の種類や内容、求められる能力、働く上で必要な知識・マナーといった『**⑦仕事理解**』があがっており、高校生年代にもイメージしやすいように、アルバイト場面における上司の役割を例に出しながら、**職場の人間関係などに関する知識についても学ぶ必要性**が述べられていました。また、『**⑧自分の現状と照らし合わせること**』『**⑨作業体験をもとに特性や得手不得手に気づくこと**』『**⑩自分の特徴や理解してほしいことを伝える準備や練習**』など、**発達障害がある場合に未体験のことはイメージが持ちにくく、自分の適性を認識することが苦手であることを踏まえた内容や、自己理解の支援を重視する声**がありました。

その一方で、**生徒たちのコミュニケーションの現状や課題を考えた時に、大人になって出来るようになるのかといった『⑬支援者側の本人の成長の可能性に対する疑問や不安』**についても率直に述べられていました。

【家族に対する支援ニーズ】について

放課後等デイサービス事業所の担当者からは、高校生になる前から家族に関わってきたこともあり、家族に対する支援ニーズにも焦点が当てられていました。具体的には、**将来に向けた家族の不安や期待に対する『⑪家族の思いと本人の状態像とのすり合わせ』と、就職だけをゴールにせず就労継続するためにどういった準備が求められるかといった『⑫就労に向けた準備の道すじを家族と話し合うこと』**などがあがっていました。

（2） 既存のプログラムやカリキュラムの課題

「既存のプログラムやカリキュラムの課題」に関して、教育・福祉領域の 6 機関の担当者から複数あがった意見を集約した結果、【担当者が感じていた課題】【担当者が感じていたニーズ】の2つのグループと、①～⑤のサブグループに分けることができました（図2）。以下に、その内容を示します。

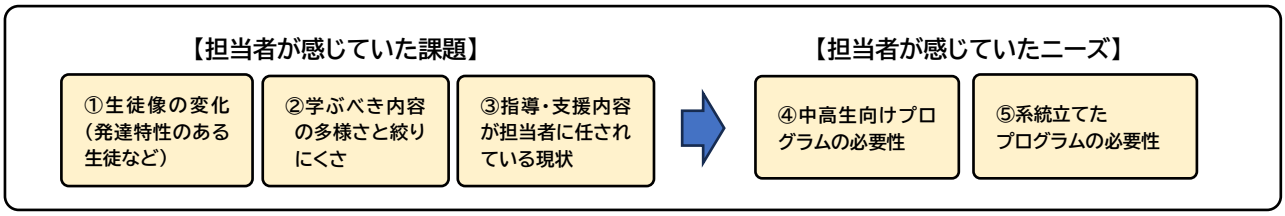


図2　プログラム実施機関の担当者が感じていた既存のプログラムやカリキュラムの課題

【担当者が感じていた課題】

プログラム導入のきっかけや、機関内の既存のプログラムやカリキュラムの課題について尋ねたところ、教育領域からは、**発達特性のある生徒やコミュニケーションが苦手な生徒の増加といった『①生徒像の変化』**が挙がりました。また、**発達障害のある（または支援を要する）生徒へのキャリア教育に関する指導内容が手探りであるといった『②学ぶべき内容の多様さと絞りにくさ』『③指導・支援内容が担当者に任されている現状』**が教育領域と福祉領域から共通して述べられていました。

【担当者が感じていたニーズ】

また、教材や題材を用意してはいるが、中高生年代向けに合うものが少ないと感じていたことや教育領域における指導案や福祉領域における支援計画にまで落とし込んだものではなかったことなどから、**『④中高生向けプログラムの必要性』『⑤系統立てたプログラムの必要性』**といった支援者側のニーズがプログラム活用のきっかけとなったと考えられます。

この他、高校卒業後に就職を目指す生徒が多い高等学校からは「実際の働く場面で役立つコミュニケーションを学ぶ機会の必要性」があがり、複数のライフステージを支援する特別支援学校からは「小学生から高校生まで連続性のあるキャリア教育を計画していく必要性」が指摘されていました。これらのことから、**様々な内容を学ぶというよりは個々の生徒に応じたオーダーメイドの支援をどのように提供していくか、そして、発達障害のある生徒が高校生年代で学ぶべき内容をどのように設定していくかといった視点が重要である**と考えられます。

3 導入後の反応や変化と機関への影響

(1) 本人たちの反応や変化

「本人たちの反応や変化」に関して、教育・福祉領域の 6 機関の担当者から複数あがった意見を集約した結果、【本人たちの反応】【本人たちの変化】の2つのグループと、①～⑪のサブグループに分けることができました(図3)。以下に、その内容を示します。

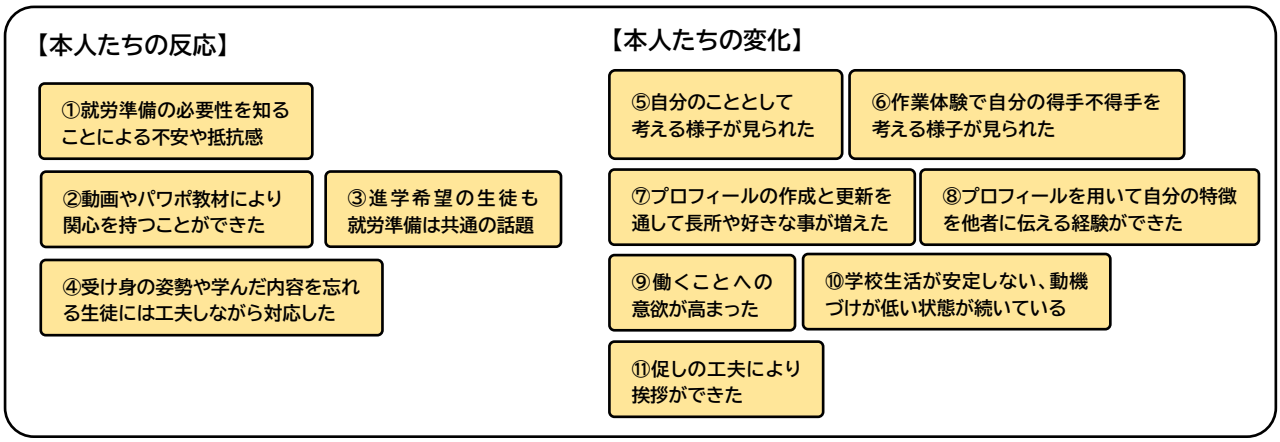


図3 プログラム導入後の本人たちの反応や変化

【本人たちの反応】

職場における適切なコミュニケーションやマナーなどを講義で学んだ際に、「クッション言葉も使わないといけないの？そんなのできない」といった**『①就労準備の必要性を知ることによる不安や抵抗感』**が挙がりました。「導入前の本人たちの支援ニーズ」として「漠然とした不安」や「成功体験の乏しさ」があがっていたことも踏まえると、**キャリア教育などを進めていく上で生じ得る反応であるとも言えます。こうした本人たちの不安を理解しながら、全部出来るようにならなくてもよいことや少しずつ準備していけばよいことを伝えることが大切だと考えます。**また別の機関からは、**「最初はかしこまってしまうことがあったので受け身にならないよう、例え話をしたり自分だったらどうするか協議したりする時間を意識して確保した」など、『④受身の姿勢や学んだ内容を忘れる生徒には工夫しながら対応した』という工夫**もあがっていました。

この他、**『②動画やパワポ教材に興味を持つことができた』**といった話題や「進学希望の生徒も“どっちみち就職するので”とまじめに受けてくれた」など、**『③進学希望の生徒も就労準備は共通の話題』**といった話題があがっていました。また、「アルバイト経験がある生徒にも復習になる」など、生徒一人ひとりの経験値の違いや進路希望の違いがある中でも、関心を持って取り組んでくれた様子が窺えました。

【本人たちの変化】

『①自分のこととして考える様子がみられた』については、プログラムの中で職場のコミュニケーションについての大切さを聞くことで、部活動で挨拶が大切と言われている経験とつながった話題や、プログラムに加えて職場見学なども繰り返していく中で生徒自身が働くことを想像し始めた話題などがあがっていました。これは、「導入前の本人たちの支援ニーズ」としてあがっていた**「将来に向け今の自分自身の課題点を考える機会」とまでは言えませんが、現状の生活に目を向けてみる意識がわずかではあるが芽生えたケースがある**と言えます。

『⑥作業体験で自分の得手不得手を考える様子がみられた』では、担当者から「取り組めそうな作業や苦手な作業について話すなど、作業体験は生徒の反応が大きかった」との声があり、「自分なりに工夫したり、質問などをしてみたりする様子も見られた」との話題があがっていました。また、**取り組んできたことを一緒に振り返ることで、『⑦プロフィールの作成と更新を通して長所や好きなことが増えた』という話題や「担当する教員と初めて面談する際に、プロフィールを見ながら本人に話してもらった」など、『⑧プロフィールを用いて自分の特徴を他者に伝える経験ができた』という話題**があがっていました。

本人の行動面の変化としては、「1 年時にプログラムの内容を学んだ生徒が2年時にアルバイトを始めた」といった『**⑨働くことへの意欲が高まった**』というケースがある一方で、『**⑩学校生活が安定しない、動機づけが低い状態が続いている**』というケースもありました。当然ながら、**将来に向けた準備を考えることをテーマにした本プログラムが個別のニーズにマッチしない場合がある**とも言えます。あらためて、プログラム導入を検討するにあたり、**多様な状態像がある生徒への支援をどのように進めていくことができるのかといった支援現場における実情を踏まえる必要があると考えます。**このほか、「生徒の名前を呼んでから声をかけると、挨拶を返すことができた」など、生徒の特性を踏まえて支援者側が関わり方を工夫してみることで、『**⑪促しの工夫により挨拶ができた**』ことにつながった話題もありました。

（2） 機関内への影響

「機関内への影響」に関して、教育・福祉領域の 6 機関の担当者から複数挙がった意見を集約した結果、【同僚への影響】【組織への影響】の2つのグループと、①～⑤のサブグループに分けることができました（図4）。以下に、その内容を示します。

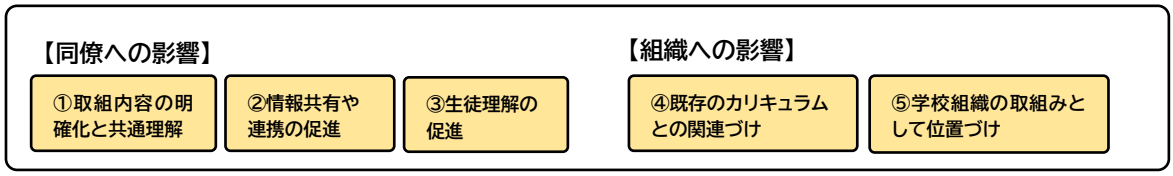


図4 機関内への影響

【同僚への影響】

本プログラムを実施することで、上司や同僚、組織の文化などに影響があったか尋ねたところ、「どういったことに取り組めばいいのかについて職員間で共通理解を持つことができた」や「生徒の状態像に合わせた教育・指導の選択肢の 1 つとして知ってもらえた」といった『**①取組内容の明確化と共通理解**』があがっていました。また、「教員間でキャリア教育の情報交換を行うきっかけになった」といった『**②情報共有や連携の促進**』もあげられていました。これらにつながる点としては、教育領域の担当者から「指導案があり、指導・支援のポイントが分かる」との感想もいただきました。

加えて、教育領域の担当者からは、「作業に取り組む様子から生徒の個別の特性に気づいた」「学習以外の生徒の得手不得手について気づいたことが多かった」といった『**③生徒理解の促進**』が強調されていました。これは、**作業体験の機会が限られている高等学校のカリキュラムにおいて、本プログラムの実施をきっかけに、学習以外の本人の困難さについて支援者側の気づきにつながったのではないか**と考えます。また、「授業の様子やトリセツを通して担当者自身の指導の振り返りや気づきにつながった」といったこともあがっていました。本プログラムを通して、**支援者側も本人の個別の特性について整理する機会になったのではないか**と考えます。

また、福祉領域の担当者から「取組方針を家族や外部の方に向けて伝えやすくなった」などの感想があり、「家族に対する支援ニーズ」としてあがっていた**「就労に向けた準備の道すじを家族と話し合う」ための具体的な材料の 1 つになったこと**が窺えました。

【組織への影響】

「年間計画があることで、コンセプトの共有やカリキュラム間の関連づけにつながった」といった『**④既存のカリキュラムとの関連づけ**』があがっていました。これは、**色々な科目や支援内容について、“卒業後に向けた準備の要素”として活かせることはないか、連動できる部分はないかといった意識が組織に広がった**とも言えます。卒業後を見据えた準備について生徒が自分ごととして捉えていく支援につながっていくためには、プログラム単体では当然ながら十分ではありません。担当者の方々がキーパーソンになって、**卒業後を見据えた指導・支援のあり方について、組織内に発信していく際のツールの 1 つになったのではないか**と考えます。また、「プログラム活用を含む通級の取組が前期・後期の学校評価の参考になっている」など、『**⑤学校組織の取組みとして位置づけ**』につながっているとの話題もあがっていました。

4 考察

プログラム活用例からみたカスタマイズ

カスタマイズとは、「個々のニーズに合わせて既存のものを変更・調整する」という意味です。「導入前の課題やニーズ」「導入後の反応や変化と機関への影響」と、Ⅳ教育・福祉領域における活用例で紹介した「活用機関による調整や工夫／追加した内容」をもとに、本プログラムのカスタマイズに限定せず、各機関の既存のカリキュラムや支援者の関わり方を含めた支援環境側のカスタマイズという観点で整理しました。

①個別の理解度に合わせたプログラムのカスタマイズ

講義資料のカスタマイズとして**「対象となる生徒の特性に合わせた情報量の調整や追加資料」**などがなされており、講義の進め方として**「注意集中の持続や興味関心を引き出す」「学んだ内容を覚えてない生徒への再学習の工夫」**なども行われていました。このように、**特別支援教育における「基礎的な環境整備」と言われている指導・支援の工夫がプラスされることが、プログラムを進める際の留意点**であると言えます。

また、“自分だったらどうするか”と問いかけるなど、**「自分の現状と照らし合わせる」**ことが重視されていました。**プログラムの中で取り上げている内容と日常生活場面との接続が、支援者が意識しておく役割の1つ**だと言えます。

②各機関の既存のカリキュラムを活かすカスタマイズ

プログラムの全てのコマを実施した機関もあれば、学年別に使い分けている機関もありました。例えば、高校1年生段階では一通りやってみて、インターンシップや就職活動がある高校2年生や3年生で、自己管理に関する内容や職場でのコミュニケーションに関する内容のコマを事前学習として取り上げるといった組み方です。こうした**「学年別の学びの内容に対応させること」が効果的な学びにつながる**と言えます。

また、高等学校普通科や放課後等デイサービス事業所では、作業体験の場を用意しにくい点の工夫として、高等学校であれば簡単な模擬作業からやってみたり、学校行事を上手く活用したり、また放課後等デイサービス事業所であれば職場見学を組み合わせたりと、**特別な取組を始めなくてもアイディア次第で体験機会を用意できる**ことも、プログラム活用機関の皆さまからお聞きしました。

③自己理解を深めるための関わり方のカスタマイズ

プロフィールシートやトリセツの作成では、**「教員と生徒の関係づくりのツールとして」「学校生活で経験したことを成功体験としてフィードバックしながら振り返った」**などがあげられていました。本プログラムにある各指導案には、**講義前のチェックリストやワークシートで、各回のテーマに関連した自身の現状を確認する機会を設ける**と共に、**支援者側のスタンスとして生徒の自己評価や捉え方を把握しつつ、「こんな場面があったよ」と一緒にエピソードを振り返ること**を支援のポイントにあげています。こうした日々の出来事を話題にできることは、**本人のことをよく知る身近な支援者だからこそ担える役割**ではないかと考えます。

自己理解の指導・支援に関するポイントとして、**生徒の「こうなりたい」という願いを出発点とし、成功体験による自信の獲得や自己肯定感の向上を軸として、自分の課題となる点の理解や、必要な対応方法の検討について進めていくことの重要性**が述べられています。[11]

本プログラムの導入後に見られた本人の反応や変化は、自己理解のステップからすると、“自分のことに目を向ける”“自分のことについて周りの人と話す”ことの芽生えであるとも評価できます。次のステップとして、自分の得意なことや苦手なことを整理していくことにつなげるためにも、**個別の評価に基づいて（同年代と比べてではなく、本人のこれまでの頑張りを評価して）、経験したことの中から成功体験を一緒に見つけることが支援者の大切な役割**と考えます。

---

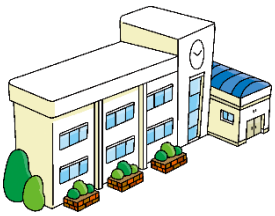
[11] 国立特別支援教育総合研究所（2021）：発達障害のある子供の教育に関わる全ての教員の皆さまへ　もしかして、それ･･･二次的な障害を生んでいるかも･･･？. https://www.nise.go.jp/nc/cabinets/cabinet_files/download/1079/08f50f2da9864d68fd321cb3595a1aaa?frame_id=1235（2025/01/15 参照）.

Ⅳ　教育･福祉領域における活用例

本プログラムを活用した教育･福祉領域の 6 機関の担当者の方に、導入のプロセスについてアンケート及びインタビュー調査の機会をいただきました。それぞれの機関のカリキュラムや体制に合わせた活用例として整理したものを以下に紹介します。

活用例 A） 高等学校における「通級指導」を通した取組

・実施機関：普通科昼間定時制課程（単位制）通級指導
・定員：40 名／学級数：1 学年 1 学級　※2024（R6）年度時点
・プログラム実施担当者：通級担当
・プログラム活用の枠組：通級指導（週 2 時間）の中で実施
・プログラム活用期間：2 年



（1）プログラムの対象者（2023 年度に実施した対象者）

学年	高校 2 年生、高校 3 年生
発達障害の有無	発達障害の診断の有無に限定しない生徒（発達障害診断ありの生徒含む）
知的障害の有無	知的障害がある生徒も含む（IQ70 以下）
進路希望	・就労（一般）を希望 ・就労（障害者雇用）を希望 ・障害福祉や職業リハビリテーションの就労準備を行う支援機関を利用予定 ・進学希望
アルバイト経験	アルバイト経験ありの生徒は 4 割程度
インターンシップ	インターンシップは 3 年時に 5 日間あり

（2）プログラム活用の経緯

①　活用の目的

通級指導を受ける生徒への自己理解支援（仕事に対する自分の興味関心や得意不得意など自分自身についての理解）に取り組むため。

②　個別の教育的ニーズ・取り組んできた指導内容

・就労に向けた不安

将来に向けた漠然とした不安が高い生徒には、どのように準備をしていくかを話してきた。

・人間関係やアルバイトでの失敗経験

人間関係やアルバイトで上手くいかない生徒が出てきた。働く体験や自分からコミュニケーションをとってみる機会が必要と感じていた。

・安定して学校に通うことが課題となる生徒の存在

知的障害がある生徒の場合は、学校の継続が難しい。また、家族のサポートが得られにくい場合は退学しまうこともある。

・早めの体験機会に誘導することで就労に向けた不安が和らぐ可能性

将来に向けた不安が高い生徒や、アルバイトにつながりにくい生徒などには、少しずつ準備してみることが大切と伝えて、２年生で個別にインターンシップの機会を提供して体験してもらってきた。

・コミュニケーションの練習機会を普段の学校生活にも取り入れていくこと

色々な場面で、どのようなコミュニケーションや振る舞いが求められるかを話題にあげ、練習してもらっていた（例：職員室に入った時に教員にどう声をかけるか。声が小さいと相手に伝わらない場合があることを伝え、職員室で練習してもらう）。

・現在の生活面で課題となっていることがあるかどうかを考える機会

今の生活について、問題や課題となる部分があるかどうか考えてもらう機会をとってきた（忘れ物等）。

③　既存のキャリア教育に対して担当者が感じていた課題

・発達特性のある生徒やコミュニケーションが苦手な生徒の増加

働きながら通う生徒よりは、中学校で特別支援学級に在籍していた生徒や不登校経験がある生徒などが多くなってきた。

・キャリア教育で学ぶ内容の多様さ、系統立てたキャリア教育プログラムの必要性

授業の中で、年々たくさんの内容を取り上げていかないといけない現状があった。また、系統立てたプログラムを自分では作ることが難しい現状があった。

・実際の働く場面で役立つコミュニケーションを学ぶ機会の必要性

最初は日常生活など全般的なスキルとしてのコミュニケーションを取り上げていたが、職場で働く際に役立つコミュニケーションや気をつけることを取り扱う必要があると感じていた。

（3）プログラム実施の枠組

実施形態	集団（1～5 人）と個別を併用／学年ごとに単独で実施			
	複数スタッフ（2 人）／1 コマ（45 分）×18 回			
使用した プログラム内容	①学校と職場の違い	●	⑦上司の役割	●
	②食事と睡眠	●	⑧作業体験１　事務作業	●
	③朝の準備や段取り	●	⑨作業体験２　図書館作業	
	④身だしなみ	●	⑩これまでの経験の振り返り	●
	⑤報告・連絡・相談	●	⑪プロフィールシート	●
	⑥挨拶と報告	●	⑫トリセツ	●

（4）活用機関による調整や工夫／追加した内容

・高等学校普通科で作業体験を用意するために

学校に図書館がないので、「⑨作業体験２　図書館作業」の代わりに、精神科医療機関の ASD 向けプログラムを参考にして、「ボルト組み立ての模擬作業」を実施した。

・学年別の学びの内容に対応させるために

２年生には、後期に全てのプログラムを順番に実施した。前年度に実施したコマと重なっている部分は、「前回こんなことしたよね」と振り返りながらできたのはよかった。３年生には、就職活動として職場見学を行う前に、事前学習としてプログラム⑤⑥⑦を実施した。

・教員と生徒の関係づくりのツールとして

プログラム⑪を７月と３月に実施。作成は生徒本人にＰＣで作成してもらった。

（5）本人たちの反応や変化

・プロフィールシートの作成が会話の補助ツールとなって話すことができた

7 月の面談前にプロフィールシートにチェックをしてもらい、それを見ながら教員が話しかけていくと生徒からも少し話す様子が見られた。

・自分の特徴について他者に伝えた

3 月に、プロフィールシートやトリセツを見ながら自分のことを少し話ができるようになった。「苦手なこと・場面」について３月に更新した際にはチェックする項目が少なくなったケースがあった。

（6）機関内への影響について

・教員間の情報共有の促進

学級担任と通級担当とで、プログラムに取り組んだ本人の様子を共有するようにしている。

・通級の取組に在籍級担任も協力

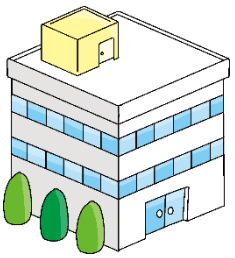
本人が書いた手帳に通級担当がコメントを書き、担任にも渡してコメントを書いてもらって本人に返すようにしている。

・学校組織全体の取組として評価

プログラム活用を含む通級の取組が、前期・後期の学校評価の参考になっている。

活用例 B）高等学校における学校設定科目と LHR を活用した取組

・実施機関：普通科通信制課程（単位制）　通学コース
・定員：80 名（通学コース＋通信コース）
　学級数：1 学年 1 学級（通学コース）　※2024（R6）年度時点
・プログラム実施担当者：学級担任
・プログラム活用の枠組：チャレンジ講座（週 2 時間）と LHR を使って実施
・プログラム活用期間：1 年



（1）プログラムの対象者（2023 年度に実施した対象者）

学年	高校 2 年生
発達障害の有無	発達障害の診断の有無に限定しない生徒（発達障害診断ありの生徒含む）
知的障害の有無	知的障害がない生徒のみ（含：疑いはあるが検査は受けていない）
進路希望	・就労（一般）を希望 ・就労（障害者雇用）を希望 ・進学希望 ・具体的な進路希望がまだない状態
アルバイト経験	アルバイト経験ありの生徒は 5 割程度
インターンシップ	学校のカリキュラムとしては無し

（2）プログラム活用の経緯

①　活用の目的

既にキャリア教育の一環として、就労準備に関する授業や SST などの指導を行っているが、既存の内容をより充実させたいため。導入にあたっては、具体的な進め方が分からないので、担任、副担任、進路指導担当で、おかやま発達障害者支援センターを訪問して説明を受けた。その後で上司に相談し、スムーズに取り入れることができた。

②　個別の教育的ニーズ・取り組んできた指導内容

・将来の展望やイメージの持ちにくさ

発達障害の特性があると思われる生徒は、将来の展望やイメージの持ちにくさ、自分の適性の分かりづらさが見受けられていた。

・卒業後に向けて準備していきたいという本人のニーズが希薄

高校２年生の段階でほとんどの生徒が社会人になる心構えがなかったり、卒後の進路が未定であったりすることから、就職に向けて準備をしようという気持ちが希薄であった。

独自の授業として、キャリアデザインという教科を設定。キャリアデザインには、①と②があり、2 年次にキャリアデザイン①を、3 年次にキャリアデザイン②を行う。キャリアデザインの授業では、学校法人グループのテキストを活用し、社会人のマナー（お辞儀の仕方）などを学んでもらっていた。

③　既存のキャリア教育に対して担当者が感じていた課題

・キャリア教育の内容が担当者に任されている現状

社会人のマナーに関する内容は学校法人グループ内のテキストにあるものの、各担任がそれぞれの考えで授業内容を考えたりレポート課題を出したりするなど、担任に任されている現状があった。

・中高生向けキャリア教育プログラム（仕事に向けた準備段階の学び）の必要性

キャリア教育に関するテキストは、学校法人グループ内の専門学校で使用しているものであり、すぐに仕事をする人のための内容や実業教育などであった。高等学校として自校だけが利用していた形であり、高校生年代に関連のある所だけ取り上げていたので、年間を通して学ぶ内容ではなかった。

（3）プログラム実施の枠組

実施形態	クラス単位（10～15 名程度）で実施／学年ごとに単独で実施			
	複数スタッフ（2 人）／1 コマ（45 分）×8 回			
使用した プログラム内容	①学校と職場の違い	●	⑦上司の役割	●
	②食事と睡眠	●	⑧作業体験１　事務作業	
	③朝の準備や段取り	●	⑨作業体験２　図書館作業	
	④身だしなみ	●	⑩これまでの経験の振り返り	●
	⑤報告・連絡・相談		⑪プロフィールシート	●
	⑥挨拶と報告		⑫トリセツ	●

（4）活用機関による調整や工夫／追加した内容

・注意集中の持続や興味関心を引き出すために

講義では、パワーポイントで説明するだけでは生徒は聞いてくれないため、ワークシート（穴埋め）を作り、埋めてもらいながら進める工夫をした。前年度実施した内容であってもやったことを覚えていない生徒も多く、クイズ形式で再度取り扱うこともあった。

・自分の現状と照らし合わせるために

例えば、身だしなみを整えるという話題は、生徒によっては何を今更と感じる場合もあり、どのように関心を向けてもらうかがポイントになる。自分のことをモニターすることから始める必要があると思い、プログラム②③⑦に関して生徒が興味を持ちそうな画像や動画を探して追加した。生徒も教員も笑いながら見た。笑ったりした方が記憶に残ると感じた。

・高等学校普通科で作業体験を用意するために

プログラム⑧⑨の作業体験は、校内で適切な作業がなかったので校内販売実習を計画し、計画グループ（メニューを考える、ポスターを作る、買い出し計画を立てるなど比較的高度な役割）と物つくりグループ（見本となる動画を見ながらクラフトテープでかごを作るなど比較的簡単な役割）に分けて相談や作業を実施した。その中で、クッション言葉や相談をする等の内容を取り入れた。

・取り組む時間を確保するために

開校７年目ということもあって元々自由に使える時間が多く、2 年次はチャレンジ講座や LHR で時間を捻出した。3 年次になり必要なコマのみ実施する場合は、LHR、総合的な探究の時間（週 1 時間）、キャリアデザイン②（週 3 時間）を使って実施した。

（5）本人たちの反応や変化

・プロフィールシート更新を通して、生徒の自分自身に向けた意識の違いが見受けられた

プログラム①ではプロフィールシートについて選ぶ項目が曖昧だったが、プログラム⑪で、それまで取り組んだことや経験したことを一緒に振り返りながら更新してみると、選択する項目が増えていた。生徒の自分自身に向けた意識の違いが理由であると思う。

・生徒の特性を踏まえて声をかけると挨拶を返すことができた

挨拶をしても素通りする生徒がおり、何で挨拶しないのかその理由を考えて、本人の特性に合わせて名前を呼んでから挨拶するようにしてみたところ、挨拶を返してくれるようになった生徒がいた。

・様々な生徒の状態像に合わせてクラス全体でプログラムを行う場合の難しさ

出席したりしなかったりの生徒への対応が難しかった。また、名前を呼んでも伏せてしまう生徒もいた。急に出席しても、“将来のことを考えよう”というこのプログラムに興味を持つことが難しく、そのような生徒には全体で授業をしても難しいと感じた。

（６）機関内への影響について

・生徒の状態像に合わせた教育・指導の選択肢の１つとして知ってもらうことができた

別の学年団の教員たちにもプログラムを紹介した。受け持つ学年や生徒像によって必要性が違うため、すぐにプログラムを導入してみようということにはならなかったが、必要性のある生徒が多いクラスの教員には、選択肢としてこの教材を知ってもらうことができた。

活用例 C） 高等学校における「総合的な探究の時間」を活用した取組

・実施機関：普通科夜間定時制課程
・定員：40 名／学級数：1 学年 1 学級（4 年制）　※2024（R6）年度時点
・プログラム実施担当者：学級担任
・プログラム活用の枠組：総合的な探究の時間[12]（週 1 時間）使って実施
・プログラム活用期間：2 年

（1）プログラムの対象者（2023 年度に実施した対象者）

学年	高校 1 年生、高校 3 年生、高校 4 年生 ※高校 2 年生は、前年度に全プログラムを実施したため記載なし
発達障害の有無	発達障害の診断の有無に限定しない生徒（発達障害診断ありの生徒含む）
知的障害の有無	知的障害がある生徒も含む（IQ70 以下）
進路希望	・就労（一般）を希望 ・進学希望 ・具体的な進路希望がまだない状態
アルバイト経験	アルバイト経験ありの生徒は 7.5 割程度
インターンシップ	あり（日数：3 日／対象学年：3 年／内容：進路希望職種に近い職場）

（2）プログラム活用の経緯

①　活用の目的

既にキャリア教育の一環として、就労準備に関する授業や SST などの指導を行っているが、既存の内容をより充実させたいため。もともと総合的な探究の時間を４観点から構成していた（基礎学力、日常生活、SST、進路探究）。SST を 2 年間やってきて、卒業に向けた出口の支援の必要性を感じていたことから「進路探究」に力を入れる配分にした。「SST」は LHR へ移行し、「基礎学力」は別のカリキュラムで実施できるので、空いた時間に導入した。

②　個別の教育的ニーズ・取り組んできた指導内容

・働きたいという本人の希望と現状の職業準備性とのギャップ

働きたいと思っている生徒も多いが、社会に出ること自体ハードルが高いと思われる生徒もいた。高校生活を安心してスタートすることが求められる 1 年生では、生活習慣が整っていない場合があり、進路に合わせた指導が求められる 3～4 年生では、働くことに不安を感じている傾向が強い状況、コミュニケーションに不安を感じている状況、自分の得意や苦手が分からない状況などがあった。

・支援者側から卒業後に向けた準備に取り組むよう誘導する必要性

高卒資格が欲しいと思って入学してきたとは思うが、卒業後に向けた準備に対するモチベーションが低い生徒もおり、高校卒業時にどうなっていたいかを考える上で、インターンシップの機会を全員の生徒に設定してきた。

---

[12] 総合的な探究の時間：総合的な探究の時間は、探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを目標にしている。その実践においては、「学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立することが大切である」とされており、高等学校に関しては、「生徒の実情や地域から期待される役割などにおいて非常に多様であり、総合的な探究の時間においてどのような資質・能力の育成を目指すのかということがその高等学校のいわばミッションを体現するものとなるべきであり、学校全体で教職員が連携してその実現に向かっていくことが必要である」といったことが述べられている。
文部科学省（2018）：高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　総合的な探究の時間編. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/11/22/1407196_21_1_12.pdf（2025/01/15 参照）.

・まず学校生活の安定をサポートする必要性

夜間定時制として運営してきたので、以前は「働きながら学ぶ」を大前提に年齢が高めの生徒が在籍していた。近年は、16～17 歳で入学と年齢が下がり、不登校経験がある生徒や家庭の経済的な事情から働く必要のある生徒が在籍するようになった。１年生は学校に慣れる、２年生になるとハローワークと連携してアルバイトを斡旋してきた。

③　既存のキャリア教育に対して担当者が感じていた課題

・発達障害のある（または支援を要する）生徒へのキャリア教育に関する指導内容が手探りであること

発達障害のある生徒が多い現状があり、既存の SST 教材などの書籍を参考にしながら授業研究を手探りでやっている現状があった。教員 1 名が教材作成したものをコマ担当の教員が指導する分業で行っていたが、教材としてはできていても指導案は無かった。

（3）プログラム実施の枠組

実施形態	クラス単位（5～15 名程度）で実施／学年ごとに単独で実施			
	複数スタッフ（2 人） 1 コマ（40 分）：1 年生 4 回、3 年生 2 回、4 年生 3 回			
使用した プログラム内容	①学校と職場の違い	●（1 年生）	⑦上司の役割	●（4 年生）
	②食事と睡眠	●（1 年生）	⑧作業体験１　事務作業	
	③朝の準備や段取り	●（1 年生）	⑨作業体験２　図書館作業	
	④身だしなみ	●（1 年生・3 年生）	⑩これまでの経験の振り返り	
	⑤報告・連絡・相談	●（4 年生）	⑪プロフィールシート	●（3 年生）
	⑥挨拶と報告	●（4 年生）	⑫トリセツ	

（4）活用機関による調整や工夫／追加した内容

・学年別の学びの内容に対応させる工夫として

プログラム③「朝の準備」は、インターンシップ前に実施した。夜間定時制であることから登校前の準備として進めた。

・対象となる生徒の特性に合わせた情報量の調整や追加資料

基本的には、担任が講義資料の工夫や修正をした（例：パワーポイント資料の文字を減らした、宛名書き作業の際に見本を作成した、プラスアルファで参考資料を配布した）。

・学校生活で経験したことを成功体験としてフィードバックしながら振り返る

プログラム①⑪を、学校行事の後に「成功したね」と振り返りながら、その都度記入していった（例：球技大会や文化祭でお茶を配る、ブースをつくる等の役割をこなすことができた）。インターンシップを経験した後に、「履歴書の書き方」の授業で１年前に作成したプロフィールシートを見ながら再度作成してもらったら、〇やチェックの数が増えていた。また、色々な成功体験を積んで３年生になって自己肯定感が高めの時に「プロフィールシート」を書いてもらった。

・実際の職場に近い環境下で報告・質問・相談の練習となるような工夫として

プログラム⑧⑨で、報告を受ける教員が忙しそうなふりをしてみることや、上司に質問するという内容に加えて同僚に聞いてみることを勧める内容を加えた（メンター的な役割の人に質問してみる）。

・教員チームとして継続実施していくための工夫として

教員 9 人がプログラムに関わってくれており、全員が最初から分担しながら実施した。各クラス担任が主に指導し、T2 を導入して個別支援に対応した。担当者がひとりの場合、転勤したら分からなくなることを防ぐため、お互いの授業を見学しあった。

（５）本人たちの反応や変化

・進学希望の生徒にとっても就職に向けた準備は共通した話題

進学希望の生徒ほど、まじめに受けてくれる。「どっちみち就職はするので」という形で始めている。

・作業体験よる得手不得手に関する気づき

作業体験は一番反応が大きい。「１人で黙々と作業をするのが好きだと分かった」「事務仕事は無理。接客の方がむいている」など、就職活動をする時の職種選びの参考になった。

・プログラム後にアルバイトを始めた

1 年次に全部のコマを経験した生徒で、2 年次になってアルバイトを始めた生徒がいた。

（６）機関内への影響について

・教員間でキャリア教育の情報交換を行うきっかけ

プログラム導入時期に、プログラムの内容自体を話し合って、キャリア教育に関して情報交換することができた。

・作業に取り組む様子から生徒の個別の特性に気づいた

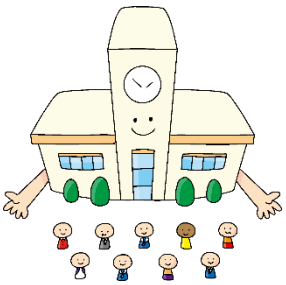
この作業はできるだろうという決めつけがあったが、実際してみると難しい場合もあり、生徒の新たな部分を知ることができる材料となった。また、できるようになるためには、ある程度時間や段階が必要だと予想するようになった。

・学習以外の生徒の得手不得手について気づいたことが多かった

意外にも封入作業にものすごい時間がかかり、学習以外の本人の得手不得手について、教員が気づいたことが多かった。

活用例 D） 特別支援学校における教員間の連携体制を意識した取組

・実施機関：特別支援学校高等部 肢体不自由児部門
・定員：20 名／学級数：複式学級　※2024（R6）年度時点
・プログラム実施担当者：進路指導主事
・プログラム活用の枠組：学校設定科目である「産業社会と人間」[13]
（年間 18 時間）を使って実施
・プログラム活用期間：4 年



（1）プログラムの対象者（2023 年度に実施した対象者）

学年	高校 1 年生、高校 2 年生、高校 3 年生
発達障害の有無	発達障害の診断の有無に限定しない生徒（発達障害診断ありの生徒含む）
知的障害の有無	知的障害がある生徒も含む（IQ70 以下）
進路希望	・就労（障害者雇用）を希望 ・障害福祉・職業リハビリテーションの就労支援機関利用を予定 ・進学希望
アルバイト経験	アルバイト経験がない生徒のみ
インターンシップ	あり（2 年時に校内実習／3 年時に校外実習）

（2）プログラム活用の経緯

①　活用の目的

既にキャリア教育の一環として、就労準備に関する授業や SST などの指導を行っているが、既存の内容をより充実させたいため。

②　個別の教育的ニーズ・取り組んできた指導内容

・一人ひとりの進路に合わせたキャリア教育を行う必要性

卒業後の就労や進学の選択肢が幅広く、それぞれのキャリア実現の素地が必要だが、多くの人材をあてることが難しく、質の担保が課題であった。

・困ったときにヘルプを出す練習の機会、自分に必要なサポートの理解と整理

障害者雇用の職場に就職した生徒のアフターフォローをする中で、自分が困っていることを周囲に伝えることが難しかったり、一緒に働く人に合理的配慮に関する内容（自分の特性や配慮点）を十分に伝えることができていなかったりすることが、職場定着上の課題だと感じていた。

③　既存のキャリア教育に対して担当者が感じていた課題

・小学生から高校生まで連続性のあるキャリア教育を計画していく必要性

支援学校に在籍する生徒は、小学部から高等部まで最長 12 年間在籍する。中学部 3 年で取り組んだ内容と同じような事を高等部 1 年でもしている場合があった。そのため、個々のニーズを捉え将来の見通しを共有しながら、小学部から効率的につなぐ視点やその仕組みづくりをしていく教員のリーダーシップが必要と感じていた。

---

[13] 産業社会と人間:「産業社会と人間」は、平成5年に高等学校に新たに設けられた「総合学科」の中の原則履修科目のひとつ。総合学科は、「普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科であり、高等学校教育の一層の個性化・多様化を推進するため、普通科、専門学科に並ぶ新たな学科として設けられたもの」とされている。「産業社会と人間」の目標は、「ア　自己の生き方を探求させるという観点から、自己啓発的な体験学習や討論などを通して、職業の選択決定に必要な能力・態度、将来の職業生活に必要な態度やコミュニケーション能力を養うとともに、自己の充実や生きがいを目指し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度の育成を図ること」、「イ　現実の産業社会やその中での自己の在り方生き方について認識させ、豊かな社会を築くために積極的に寄与する意欲や態度の育成を図ることとすること」とされている。
文部科学省(1993):総合学科について. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/seido/1258029.htm(2025/01/15 参照).

（3）プログラム実施の枠組

実施形態	集団（1～5 人／複数の学年を合同で実施）と個別を併用			
	複数スタッフ（2～3 人） 1 コマ（50 分）×18 回			
使用した プログラム内容	①学校と職場の違い	●	⑦上司の役割	●
	②食事と睡眠	●	⑧作業体験１　事務作業	●
	③朝の準備や段取り	●	⑨作業体験２　図書館作業	●
	④身だしなみ	●	⑩これまでの経験の振り返り	●
	⑤報告・連絡・相談	●	⑪プロフィールシート	●
	⑥挨拶と報告	●	⑫トリセツ	●

（4）活用機関による調整や工夫／追加した内容

・教員チームとして継続実施していくための工夫として

進路指導担当者（プログラム実施担当者）が主として授業を担当し、プログラムに参加する生徒の担任（2～3 人）も一緒に参加する体制をとった。1 コマで足りない場合や欠席の生徒への対応として、自立活動、総合的な探究、進路関係の行事の時間を利用して横断的に実施した。

・年間スケジュールと関連を持たせるための調整として

1 コマ 50 分で、トリセツは 4～5 時間かけているため年間約 18 コマを使って実施した。既存のカリキュラムは実技的（作業的）な授業が多かったため、その一部をプログラムに代えて実施した（時間数としては変更なし）。例えば、実習の前に講義をもってくるなど、既存のカリキュラムとプログラムが関連のある流れになるようにした。

・小学生から高校生まで連続性のあるキャリア教育にむけて

高等部Ⅰ類（肢体不自由あり・知的障害なし）の生徒に対して導入したプログラムを、小学部と中学部のⅠ類型にも紹介した。また、高等部Ⅱ類（肢体不自由あり・知的障害あり）の担任に対し、就職から逆算して在学中から準備することの必要性をプレゼンした。プログラム開始以降も授業に参加してもらったり、生徒が記入したシートなどを見てもらったりして、プログラムの内容や生徒の様子を知ってもらうようにした。

・学んだ内容の定着にむけて

毎年繰り返してプログラムを実施しているが、学んだ内容の定着が難しいと感じてきた。そのため、1 年目は知識として「知る」、2 年目は「定着」を目指す、3 年目はインターンシップでどこでも誰に対しても「学んだことを活かす」ことができることを目指している。プログラム内容の点検や実践編を設けるなどの工夫が必要と思う。

（5）本人たちの反応や変化

・動画教材への関心

寸劇動画などがあったことで、生徒も関心をもって聞いてくれた。

・受け身の生徒への対応の工夫

最初はかしこまってしまうことがあった。受け身にならないよう例え話をしたり、自分だったらどうするか協議する時間を意識して確保したりした。

・作業体験で自分なりの対処や工夫をしてみる

出来た・出来なかったではなく、難しいと感じたことも、もっと上手く出来るようになるにはどうすればよいか自分で工夫したり、周囲にサポートしてもらったりしてみる様子など、前向きな姿勢が見られるようになった。

（６）機関内への影響について

・同僚（教員）のスキルアップ

教員のスキルアップにつながった。

・生徒とのコミュニケーションの増加

生徒とのコミュニケーションが増えた。

・プログラム以外のコミュニケーション場面にも汎化

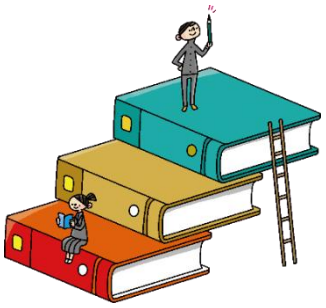
教員、保護者、身近にいる大人が言葉遣いなど意識してくれることが増えた。

・卒業後を見据えた準備の必要性に対する教員と生徒の意識

本プログラムを複数年実施してきた中で、校内で本プログラムの内容をしっかり理解している教員やプログラムを使って指導にあたることができる教員が限られていた。また、本プログラム活用を通じて、教員が生徒を理解するきっかけや教員と生徒の間で卒業後を見据えた準備が話題になればと思うが、まだまだ難しい現状はある。

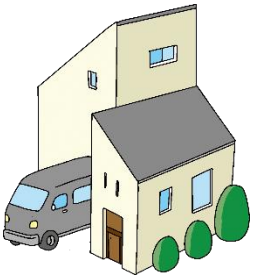
・他校に取組を発信

学校としてプログラムを通した取組を実践報告という形で発信する機会があった。他校の特別支援教育コーディネーターや進路指導担当、職業コースがある特別支援学校などに関心を持ってもらえたらと感じている。



活用例 E） 放課後等デイサービス事業所における個別支援での取組

・実施機関：放課後等デイサービス事業所
・定員：10 名　※2024（R6）年度時点
・プログラム実施担当者：高校生担当
・プログラム活用の枠組：個別支援（週１）の中で実施
・プログラム活用期間：2 年



（１）プログラムの対象者（2023 年度に実施した対象者）

学年	高校 1 年生、高校 2 年生、高校 3 年生
発達障害の有無	発達障害の診断ありの生徒のみ
知的障害の有無	知的障害がない生徒のみ（含：疑いはあるが検査は受けていない）
進路希望	・就労（一般）を希望 ・進学希望
アルバイト経験	アルバイト経験がない生徒のみ
インターンシップ	なし

（２）プログラム活用の経緯

①　活用の目的

既にキャリア教育の一環として、就労準備に関する授業や SST などの指導を行っているが、既存の内容をより充実させたいため。事業所としては、学習支援を中心に取り組んできた。小学生から継続してきた利用児が中学生高校生へと成長するにつれ、学習に関するニーズだけではなく自分で生活をマネジメントする力を養うための支援や就職に向けた準備に関する支援の必要性を感じていた。

例えば、朝起きるのが苦手な利用児が高校卒業後に就職を目指す場合に、雇用条件は良いものの、朝早くから仕事が始まる会社に就職して苦労したケースもあった。事業所内では特性に合わせた支援を提供できるが、卒業後を見据えた支援をどこまですべきか悩んだり、保護者や学校が進めていく進路の話題に放デイとしてどこまで関わったらよいか悩んだりしながら、色々な教材を組み合わせて取り組んできた。

②　個別の支援ニーズ・取り組んできた支援内容

・将来を見据えて、今何が必要かを本人だけでイメージすることの難しさ

どういったことを何のために準備していくかを考えることや働くことのイメージを持つことが、特性もあって本人だけでは難しいと感じる。

・将来に向け、今の自分自身の課題点を考える機会の必要性

将来に向けた準備の話をしても「何とかなる」と思っている様子で、イメージが曖昧と感じることがあった。今の生活が土台となり将来につながっていることを知ってほしかった。

・支援者側の本人の成長の可能性に対する疑問や不安

例えば、現段階で挨拶を返すことが難しい場合に、大人になって出来るようになるのかと感じていた。

③　既存のキャリア教育に対して担当者が感じていた課題

・放課後等デイサービスにおける高校生年代向けキャリア教育教材の必要性

高校生年代の利用児が全体の１割程度（7～8 名）在籍している。教材がそもそも無く、ニーズに合わせて既存の書籍やネットから探していた。高校生向けの教材の必要性を感じていた。

（3）プログラム実施の枠組

実施形態	個別（1 対 1）　※①は集団（2～3 人）			
	スタッフ 1 名　　1 コマ（40 分）×16 回　※個別ニーズに合わせてコマを選択して使用			
使用した プログラム内容	①学校と職場の違い	●	⑦上司の役割	●
	②食事と睡眠	●	⑧作業体験１　事務作業	●
	③朝の準備や段取り	●	⑨作業体験２　図書館作業	●
	④身だしなみ	●	⑩これまでの経験の振り返り	●
	⑤報告・連絡・相談	●	⑪プロフィールシート	●
	⑥挨拶と報告	●	⑫トリセツ	●

（4）活用機関による調整や工夫／追加した内容

・高校生活に合わせて個別支援と集団支援を柔軟に実施

事業所の利用は週１回で、その他に習い事や部活に行っている利用児もいる。高校生は、利用日や時間がバラバラになりやすい。時間が重なっている場合は一緒に行うが、基本は個別に行っている。初回にプロフィールシートを作成する際には、集団で実施した。「私ってどんな性格？」と周囲に聞きながら取り組む様子も見られ、自分を客観視する機会になったと感じる。また、「戸惑ったときのサイン」やその対処などについても「自分ってどうしてたっけ？」と周囲に尋ねながら振り返っている様子も見られた。
※以前も自分の性格について別の書式で実施したことがあり、自分の特徴について話題にあげることや集団で実施することに違和感なく取り組むことができた。

・自分の現状と照らし合わせるために

パワーポイントを使って、必要なことをワークシートに記入してもらった。自分だったらどうするかと本人に投げかけながら引き出すようにやりとりし、書いてもらった。

・対象となる生徒の特性に合わせた情報量の調整や追加資料

「ビジネスマナーについて（シンプルで見やすい資料を使っている）」などを追加資料として使用した。

・現状の学校生活に関するマネジメントスキルの支援を並行して実施

テストが近いと提出物の管理の話題をあげるなど、時期に合わせて既存の内容を取り扱うこともある。
プログラム以外に追加している内容として、「実行機能力について（見通しの持ちにくさに対しスケジュール管理など考える練習）」「学校生活を乗り切るためのシート（やらないといけない事が多いことに対してどこから進めたらよいか整理する練習）」がある。利用児の進路希望に合わせて本人に合うシートを選択して使っている。

・放課後等デイサービス事業所で作業体験を用意するために

本棚があるので図書室に見立てて、試しに「プログラム⑨作業体験 2　図書館作業」を実施した。
集団で実施できなくても、事業所内にあるものを利用して個別にできればと考えている。

（5）本人たちの反応や変化

・パワーポイント教材への関心

普段はプリントを行うなどの流れだが、プログラムにあるパワーポイント資料を見ながら一緒に取り組んだ。流れも違うので本人も興味をもって聞いてくれた。

・自分の生活や経験と重ねて考える

挨拶のことを考える中で、「何で部活の先生は挨拶に厳しいのか」との発言があり、自分の生活や経験と重ねて考える様子が見られた。

・長所や好きなことが増えた

プロフィールを更新して変化を確認する機会を持っている。最初は一人で書いてもらい、書いてもらったものを見ながら一緒に振り返った。目を見て話すことが苦手な生徒が、少しずつできるようになってきた。長所や好きなことが増えてよかった。

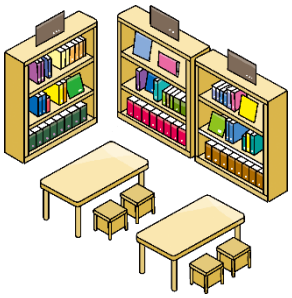
（６）機関内への影響について

・支援計画について本人と話し合う材料になった

高校生支援の１つの選択肢になったと感じている。支援計画を立てる際に、具体的な目標や内容について本人と話すことに役立った。

活用例 F） 放課後等デイサービス事業所における小集団での取組

・実施機関：放課後等デイサービス事業所
・定員：10 名　※2024（R6）年度時点
・プログラム実施担当者：就労準備担当
・プログラム活用の枠組：キャリア形成に関するカリキュラムの中で
小集団活動（月１）として実施
・プログラム活用期：1 年



（1）プログラムの対象者（2023 年度に実施した対象者）

学年	中学生～高校 3 年生（自己理解に関するテーマのみ小学校高学年も含む）
発達障害の有無	発達障害の診断ありの生徒のみ
知的障害の有無	知的障害がある生徒も含む（IQ70 以下）
進路希望	・就労（一般）を希望 ・就労（障害者雇用）を希望 ・障害福祉・職業リハビリテーションの就労支援機関利用を予定 ・具体的な進路希望がまだない状態
アルバイト経験	アルバイト経験ありの生徒は全体の 1 割程度
インターンシップ	なし

（2）プログラム活用の経緯

①　活用の目的

既にキャリア教育の一環として、就労準備に関する授業や SST などの指導を行っているが、既存の内容をより充実させたいため。

②　個別の支援ニーズ・取り組んできた支援内容

・家族の思いと本人の思いのギャップ

（取り組み姿勢が良くない利用児がいた場合に）保護者への説明として、やる気がないではなく時期の問題と伝えてきた。保護者の思いと本人の思いとのギャップはあると思う。

・家族の期待と本人の状態像のすり合わせ

保護者が身に付けてほしいと思うスキルと、今その利用児が出来るスキルとのすり合わせが必要と感じていた。

・就労の定着に必要な準備について家族と共通理解を持つ必要性

就職を必ずさせたいと考えている保護者に対して、就職だけをゴールとして考えないように、継続していけることを目指すことや就労移行支援事業所の利用を検討することなども伝えてきた。

・将来に向けた本人の意向を家族や支援者が段階的に理解していくこと

気持ち的に幼かったりユーチューバーになりたいと言っていたりする小学校高学年の利用児がおり、保護者はそれを修正したいと感じているケースがあった。まずは、就職に対して嫌な気持ちを持っていない状態であることを説明すると納得してもらえた。就職を必ずしてほしいという保護者の思いに対し、就職だけをゴールとして考えないように説明してきた。

・将来に向けた家族の不安

保護者から利用児の将来について心配する声があり、プログラムに興味をもってくれた。

③　既存のキャリア教育に対して担当者が感じていた課題

・キャリア教育で何を教えたらよいか

これまで取り組んでいたキャリア教育に関する支援では、利用児ごとに必要なスキルを教えてきた。ただ、何を目標にして何を教えていけばいいか分からないと感じるとともに、何を育てるか考えると多岐にわたると感じていた。

・系統立てたキャリア教育プログラムの必要性

本人や家族からニーズを聞いて支援計画書を作成・更新しているが、卒業後に向けた準備として系統立てて学ぶものは探しても出てこなかった。

（3）プログラム実施の枠組

実施形態	集団（10 名程度／複数の学年を合同で実施）			
	スタッフ 1 名 1 コマ（50 分）×12 回			
使用した プログラム内容	①学校と職場の違い	●	⑦上司の役割	●
	②食事と睡眠		⑧作業体験１　事務作業	
	③朝の準備や段取り	●	⑨作業体験２　図書館作業	
	④身だしなみ	●	⑩これまでの経験の振り返り	●
	⑤報告・連絡・相談	●	⑪プロフィールシート	●
	⑥挨拶と報告	●	⑫トリセツ	●

（4）活用機関による調整や工夫／追加した内容

・対象となる生徒の特性に合わせた情報量の調整や追加資料

年齢が中学生から高校生（内容によっては小学高学年も参加）と幅広いことや生徒の個別の特性を踏まえ、スライドの内容はイラストを多めにするなど大幅に変更してプログラムを活用した。（例：文字情報を減らしてイラストを追加したスライドを映写して注目を促す、ワークシートの表現を分かりやすく修正するなど）。

・連続性のある学びにむけて

前年度版から今年度版への改良として、各回でワークシートを配って使用する形式から、ワークシートをまとめて冊子にして使用した。学んだ内容が振り返りやすく、保護者にも知ってもらいやすい。また、どの利用児がどの日に休んだかも把握しやすい。

・支援制度を知る内容を追加

日本の働き方の選択肢として、障害者雇用も含め色々あることやメリット・デメリットなどの説明を加えた。障害の言葉は強調しないが、実施する前に保護者には伝えている。高校生になると、自分で検索したり聞いてきたりする利用児もいる。利用児たちには、放課後等デイサービス事業所は、自分の困りごとを解消する方法を見つける場であると説明している。就労準備のステップのひとつとして就労移行支援事業所についての説明も内容に追加した。日頃の生活の様子から、高校卒業後に就労移行支援事業所の利用が良いのではないかと思われる利用児が多く、本人に説明する際にも活用しやすい。利用したいと話す保護者もいた。

・年間スケジュールと関連を持たせるための調整として

まずは 4 月～5 月に進路について考えるカリキュラムを行い、6 月～8 月に社会人として働くために必要なスキルを学び、現在の自分の課題と今できることを考える。その上で、自分の得意不得意に合わせてハローワークの求人検索をしてみて仕事への理解を深める。9 月～12 月に職場で必要なマナー・コミュニケーションについて学び、現在の自分の課題を振り返る（プログラム⑤のスライドを参考にして「就職準備のためのコミュニケーションの学びって何だろう」というテーマを設定し、普段のコミュニケーションと仕事のコミュニケーションは違うということなどを学んでもらった）。カリキュラム（月 1 回、平日）と並行して、職場見学や職場体験（月1回、土曜）も実施した。1 月に再度ハローワークの求人検索をして求人票と給与明細の見方について学ぶ。2 月は働くことだけでなく、結婚や子どもなど自身のライフイベントについて考え体験できるゲームをする。最後 3 月に、事業所で経験したことを振り返りながら自己理解を深める。

（５）本人たちの反応や変化

・自立的に働くイメージの持ちにくさ

将来働くことを話題にあげると、「僕一人で働くイメージがなかった」「自分がするイメージを持っていなかった」「そんなの無理・・・」など働くイメージの持ちにくさを話す中学生年代の利用児がいた。

・就労に向けた準備について知ることによって生じる不安

「クッション言葉も使わないといけないの」「そんなことしないと働けないの」と言う中学生年代の利用児もいたため、「まだ中学生だから大丈夫。今知れて良かったね」と伝えた。

・自分のこととして考え始めた

プログラムの内容を取り入れた就労準備カリキュラムをすることで、自分が働くイメージを持つことができた。並行して職場見学や職場体験を繰り返すことで、取組姿勢などの変化が見られ意識をすることができるようになった。準備が必要な利用児には、早いうちから触れてほしい。取り組んだ内容を１つのワークブック形式にまとめることで、自分の変化を見ることができる。

（６）機関内への影響について

・何に取り組んでいけばよいかの学びにつながった

事業所立ち上げ時には障害児支援の経験者が１名いたものの、小学生しか担当したことがなく、中学生高校生年代の利用児に対して何をしたらよいか、必要な支援内容が分からなかった。働くことを知る・学ぶプログラムを元にしてカリキュラムを作成したことにより今は何をしたら良いかが分かる。

・何に取り組めばいいかについて職員間で共通理解を持つことができた

事業所のコンセプトとして、就職に向けた準備を掲げたが、具体的にはどんな準備が必要なのか、就職までに何が出来ていればいいのかが分からない状態からのスタートだった。プログラムを活用することで、必要な準備とは何か、職員間で同じ価値観や認識が出来るようになった。

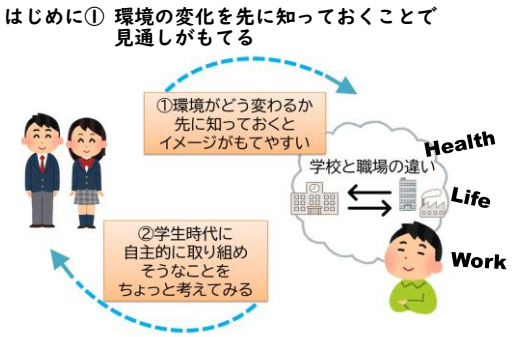
・年間計画があることで、コンセプトの共有やカリキュラム間の関連づけにつながった

年間計画を作成して取り組んだことで、別のカリキュラムでもコンセプトを押さえた流れや指針ができた。違うカリキュラムにおいても、題材を就職に関する例をあげるなどの統一感が出てきた（例：場面設定を職場にする）。

Ⅴ　資料編

1　講義資料:「学校と職場の違い」シリーズ

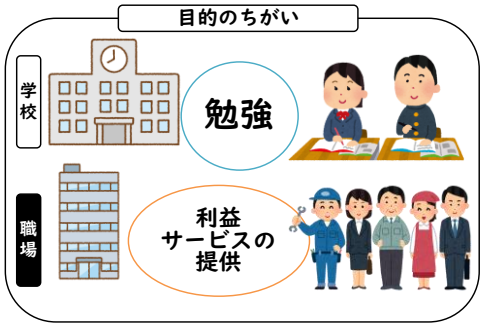
<u>プログラム①　学校と職場の違いを知ろう</u>　※一部のスライドを抜粋



● 皆さんは、これまで学校生活を送る中で、「挨拶は大事」、「身だしなみを整えよう」とか、長期休みの前には、「生活リズムを整えよう」とか、何度も言われてきたと思います。

● でも何で大事なのか、考えたことある人いますか？そういえば考えたことがないなあ、という人も多いと思います。

● そこで、何で大事かを知る手がかりとして、「学校と職場のちがい」を社会人になる前に知っておき、学生時代にできそうなことをちょっと考えてみるきっかけにしましょう。

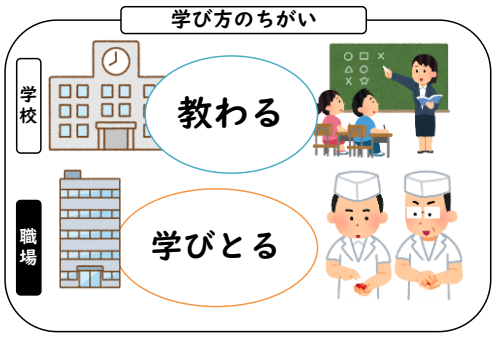


● 何といっても学校は
勉強をして様々な経験や知識を得るところです。

● 一方、職場はというと
会社としての利益をあげることやサービスを提供すること目的としています。

● つまり、サービスを受ける側から
サービスを提供し利益を上げる側のひとりになります。

● そのため、
個人の成績で評価されてきた学校とは違い、安定して働くことが職場の一員として大切になってきます。

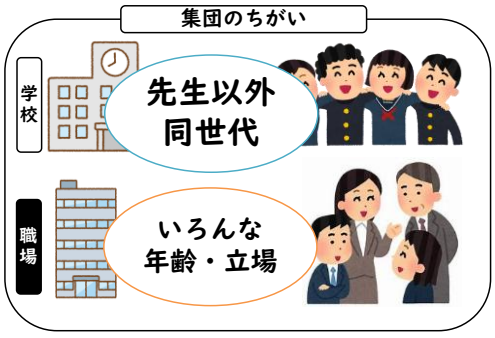


● 生徒や学生とは、
今、みなさんがそうであるように、「先生から勉強を教わる」、つまり、「教えてもらえる立場」です。

● もっと言うと、
ちゃんと「先生」という「教える」役割の人がいてくれます。

● 職場では、
同僚や上司など仕事を教えてくれる人はいますが、その人たちも自分の仕事をもっています。

● そのため、
自分からも、少し勇気を出して、「少し質問してもいいですか？」とか、「これで合ってますか？」と最低限のコミュニケーションをとりながら「学びとる」というスタンスが大切です。



● 先生以外は同世代という学校とは違い，
職場には色々な年齢や立場の人がいます。

● そのため，
色々な年齢や立場の方と一緒に働く上で，職場のルールやマナーを知っておくと役に立ちます。

● もしかしたら，
色々な「学校と職場の違い」を知ることで，働くの何だか大変そうだなーと感じている人もいるかもしれません。

● 会社が求人を出すということは，
一緒に働く人を求めている，ということです。皆さんの中には，同年齢より年齢が離れている人たちの方が話しやすい，という人もいるかもしれませんね。

2 講義資料:「よくある疑問や苦手意識」シリーズ

プログラム② 睡眠時間の確保の重要性を知ろう ※一部のスライドを抜粋

？よくある疑問や苦手意識

→こんな方法で続けてみよう

自分に合ったスケジュール管理①

寝る時間を決めても
3日坊主で終わってしまい，
逆に落ち込みます…

★自分が取り組もうとして
いることを紙に書き出して
目につくところに貼っておく

★達成できた日には〇をつける
〇が～個たまったら自分に
ご褒美をあげる『自分ルール』
を決めてみる

★〇のない日に注目しない。
出来た日に注目する！

プログラム③ 朝の準備や段取りを考えよう ※一部のスライドを抜粋

自分に合った準備や段取り①

自分でも余裕があったほう
が良いと思うのですが、
朝食を食べながらTV見てた
ら時間を忘れちゃって

★朝の準備の順番を考え直して
みると少し改善するかもしれ
ません

例えば，身支度を済ませてから
朝食をとると多少時間がおして
も大丈夫とか，朝食を食べて時
間が余ったらTVを見るなど

自分に合った準備や段取り③

遅刻しちゃいけないって
思って早めに家を出ると
早く着き過ぎっちゃって
困るんです。。。。

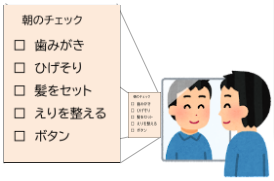
★早めに出て遅刻しないことは
良い習慣です！

★郊外実習や，アルバイト先の
近くで時間調整をする場所を
考えておきましょう

プログラム④ 身だしなみを整えることの重要性を知ろう ※一部のスライドを抜粋

自分に合った身だしなみの整え方①

家族に言われたらできるん
ですが，自分だけだと
つい忘れてしまって…



★自分確認できるように
チェックリストにする
（家族や先生に手伝って
もらって作ってもOK）

★チェックする場所は
「洗面台の鏡の横に貼
る」など、“自分で”
確認しやすい場所に貼る

自分に合ったスケジュール管理③

つめ切りとか散髪は
時々メンテナンスするものって
タイミングを逃しちゃったり
忘れちゃったりしがちで…

★月に数回でよい身だしなみは
実施する日の目安を予め決めておく

例：つめ切りは「日曜日に次の日
の支度をする時に一緒にする」
と決めて習慣にする
例：散髪は●●日後と間隔を決めて
おき，予めカレンダーやスケ
ジュール帳に記しておく

プログラム⑤　報告･連絡･相談について知ろう　※一部のスライドを抜粋

自分に合ったあいさつ①

朝，実習先の会社に着いたら課の全員の人にあいさつしてまわるべきか迷います…

フロアーに入った時に大きめの声で１回しておけば，後はすれ違った人にすればＯＫ！

自分に合ったあいさつ②

『声が小さい』とか，『相手の目を見て』とか言われてしまいます…

声が小さくても会釈も一緒にすれば良い印象になる！

目を見なくても相手の方（肩や首元）を見てするだけでも良い印象になる！

プログラム⑥　挨拶と報告のマナーを知ろう　※一部のスライドを抜粋

自分に合った報連相①

何をどこまで報告するのか迷います…

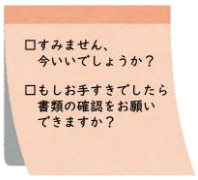
「報告」は全て終わっていなくても（完璧でなくても）進捗を伝えることが大切です

「出来ている部分」も「まだ出来ていない部分」も合わせて伝えるのも大切です

そうすれば、「出来ていない部分」の対応について上司からの指示やアドバイスを受けるきっかけとなり、より良い仕事につながります！

自分に合った報連相③

いざ上司の前に行くと何を言えばいいか，言葉が出てこないです…



コミュニケーションに苦手さを感じている人や，緊張しやすいと感じている人は少なくないです

あまりたくさんの言葉を上手に使う必要はありません。ちょっとした一言が言えれば十分です

付箋に定型句などのセリフやいくつかのパターンを書き出して貼っておいたり、メモにして持っておくといつでも確認できて安心ですよ

プログラム⑦　上司の役割を知ろう　※一部のスライドを抜粋

自分に合った指示の受け止め方①

作業の進め方の修正を受けると固まってしまったり，そのあと集中してできなくなってしまいます…

「作業の進め方の修正」は，効率的な業務や確実な業務に近づけていくために，必要なことであり、職場では日常的なやりとりです。

大きな問題や失敗と捉えず『次からやっていこう』と切り替えるのも大切です

自分に合った指示の受け止め方②

作業の進め方の修正を受けると『先に教えといてよ！』と思ってしまいます…

たくさんやったのに、やり直しをしないといけなくなるとムカッとくることもありますよね

たくさんのやり直しを防ぐためのコツとして、１～２つやってみて「こんな感じで進めていってよろしいでしょうか？」と上司に確認してもらう方法があります。自分から修正があるかどうか確認できると、自分のペースを崩さず仕事を進めていくことにつながりますよ

3 ワークシート:「プロフィールシート」「トリセツ」

ワークシート1） 私のプロフィール ①

記入日　　年　　月　　日　　氏 名(　　)

＜進め方＞
① 自分にあてはまる選択肢を選び、チェック ✓ を入れて、 カッコ内に具体的な内容を記入してください
② 先生から見て、あてはまると思う選択肢やその理由、エピソードなどをあげてみてください
③ ワークシート2 「 私の取説(トリセツ) 」の「 セールスポイント 」の欄に、選んだ項目とカッコ内の内容を参考に記入してください

好きなこと(もの)

＜興味のある分野＞
☐ 国語　☐ 数学　☐ 地理　☐ 歴史
☐ 公民　☐ 物理　☐ 化学　☐ 生物
☐ 体育　☐ 美術　☐ 音楽　☐ 家庭科
☐ その他　例：〇〇に詳しいなど
（　　）

＜学校生活の中で＞
☐（　　）の部活に入っている

＜帰宅後や休日にすること＞
☐（　　)のゲームをする
☐（　　)のTVや動画を見る
☐（　　)の本･マンガを見る
☐（　　)の音楽を聴く
☐（　　)のペットの世話をする
☐（　　)をして体を動かす
☐（　　)に出かける
☐（　　)の料理をする
☐（　　)を集めている
☐ その他　例:〇〇を作るなど
（　　）

続けていること

＜学校生活について＞
☐ 忘れ物がないよう自分でチェック
☐ 欠席・遅刻をしない
☐ 挨拶をする
☐ ノートをとる
☐ 授業中寝ない
☐ 課題提出物を期限までに出す
☐ 係活動や当番を頑張っている
☐ 部活動を頑張っている
☐ その他
（　　）

＜生活習慣について＞
☐ 早寝早起き
☐ 身だしなみを整える
☐ 朝・昼・夕の食事をとる

＜家庭生活に関連して＞
☐ 家事手伝い（具体例：　　）
☐ アルバイト（内容：　　）
☐ その他
（　　）

得意なこと･長所

＜性格・行動＞
☐ まじめ　☐ やさしい
☐ 努力家　☐ がまん強い
☐ 正直　☐ おだやか
☐ 責任感が強い　☐ 明るい
☐ 活発

☐ 挨拶をする
☐ ルールはきちんと守る
☐ みんなが思いつかないことを思いつく
☐ 興味・関心の持ち方がユニーク（らしい）

☐ 好きなことにはとても集中できる、詳しい
☐ 好きなことは、よく覚える
☐ 好きなことなら繰り返してもあきない
☐ ひとりで趣味を楽しむ力がある
☐ 繰り返しの作業などはコツコツと取り組める
☐ その他
（　　）

ワークシート1）　私のプロフィール　②

＜進め方＞　記入日　　年　　月　　日　　氏 名(　　)

① 自分にあてはまる選択肢を選び、チェック ✓ を入れて、 カッコ内に具体的な内容を記入してください
② 先生から見て、あてはまると思う選択肢やその理由、エピソードなどをあげてみてください
③ ワークシート2 「 私の取説(トリセツ) 」の「 私の特徴 」の欄に、選んだ項目とカッコ内の内容を参考に記入してください

苦手なこと・場面

＜対人関係＞
☐ 言いたいことや気持ちを言葉でうまく言えない
☐ 相手の言うことが分からなくて困ることがある
☐ グループ学習や活動は苦手・疲れる
☐ 友達とのやりとりで苦労することが多い
☐ その他
（　　）

＜性格・行動＞
☐ 好きなことを途中でやめることが苦手
☐ 気になりだすと気分を変えられない
☐ うっかりや気が散りやすい面がある
☐ 忘れ物やなくし物で困る
☐ 字を書くことや計算することが苦手
☐ その他
（　　）

＜苦手な場面（ ⇔ 安心できる場面）＞
☐ グループ活動は苦手・戸惑う
（グループより一人の方が落ち着いて取り組める）
☐ 大きな音や人のざわめきが苦手
（静かな場所かイヤホンや耳栓があれば大丈夫）
☐ 予想や予定と違うと戸惑う・疲れる
（予定が分かっていれば安心、実力をだしやすい）
☐ 新しいことは、すごく疲れる・心配
（いつもどおり、予定どおりだと安心できる）
☐ 話し言葉だけで指示されると分かりづらい
（見てわかるように伝えてもらうと理解しやすい）
☐ 一度にたくさんのことを言われると、
どれからやっていいか分からなくなる
（順をおって教えてもらえば落ち着いて出来る）

戸惑ったときのサイン・疲れや不安のサイン

＜戸惑ったときのサイン＞
☐ 身体がフリーズしてしまう
☐ 顔が赤くなる
☐ 険しい表情になる
☐ キョロキョロすることが多くなる
☐ 貧乏ゆすりが多くなる
☐ その他
（　　）

＜疲れや不安のサイン＞
☐ うっかりが目立つ
☐ 周りの音や人の声などが気になる
☐ 眠くなる
☐ 具合が悪くなる（頭痛、腹痛など）
☐ 嫌なことを思い出す
☐ その他
（　　）

落ち着くこと・休憩時間の過ごし方

＜落ち着くこと＞
☐ 深呼吸をする
☐ 落ち着く場所に移動する
☐ いらない紙を細かくちぎる
☐ 話を聴いてくれそうな人に相談する
☐ 水分をとる・お菓子を食べる
☐ 好きなことを考える
☐ 好きな風景を思い出す
☐ その他
（　　）

＜落ち着くもの＞
☐ 好きな香りをかぐ
☐ イヤホンや耳栓をして刺激を減らす
☐ お気に入りの動画や写真を見る
☐ その他
（　　）

＜休憩時間の過ごし方＞
☐ 仮眠をとる
☐ 本を読む
☐ 肩を回すなど簡単なストレッチ
☐ ひとりで過ごす
☐ クラスメートと過ごす
☐ その他
（　　）

私の取説(トリセツ)
氏名:＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　　作成日:　**年　月　日**

1)私の好きなことは
2)私のセールスポイント(続けていること・得意なこと・長所)は

3)私の苦手なこと・困りごと	
どんな場面が苦手か・困るか	具体的にどんなことが苦手か・困っているか
①	
②	
③	
4)私が戸惑ったときのサイン・　疲れや不安のサイン	

5)対策とお願い	
自分にできる対策	周囲にサポートしてもらいたいこと
6)私が落ち着くこと・休憩時間の過ごし方は	

7)私が困ったときに助けてくれる人や相談に乗ってくれるひとは	
相談内容	名前
例)学習・進路について	
例)生活面について	

Ⅵ　研究協力

1 本成果物作成に協力いただいた皆さま

本書は、令和6年度に実施した「発達特性のある高校生への高等学校卒業後を見据えた支援に関する研究会」における検討を踏まえ、作成したものです。

有識者・関係機関　※令和７年３月現在

・ 榎本 容子 氏
　独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所　発達障害教育推進センター　主任研究員
・ 薬師寺 明子 氏
　学校法人美作学園　美作大学　社会福祉学科　教授・アクセシビリティ支援 主幹
・ 小田桐 早苗 氏
　川崎医療福祉大学　医療福祉学部医療福祉学科　講師
・ 名倉 彰子 氏
　岡山障害者職業センター 所長
・ 井上 寛規 氏
　岡山県教育庁特別支援教育課　指導主事（副参事）
・ 森 真代 氏
　倉敷発達障がい者支援センター センター長　発達障がい支援コーディネーター
・ 福本 正俊 氏
　倉敷発達障がい者支援センター 発達障がい支援コーディネーター

アンケート・インタビュー調査協力機関

教育領域４機関、福祉領域2機関のご担当の皆さま

オブザーバー

・ 大内 卓也 氏
　岡山県子ども・福祉部障害福祉課　副参事

プログラム開発協力

・ 佐々木 聖子 氏
　岡山県立早島支援学校　主幹教諭

調査協力

・ 秋山　裕則　氏
　社会福祉法人旭川荘　児童心理治療施設　津島児童学院　支援員

軽演劇撮影協力

「にいみ えんげきサークル」の皆さま

2 コメント

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 発達障害教育推進センター
主任研究員　榎本 容子 氏

発達障害のある高校生の「自分らしい生き方の実現」を支えるために
― 教育と福祉がつながる新たなキャリア支援への期待 ―

本冊子『発達障害のある高校生への卒業後を見据えた発達支援「働くことを知る・学ぶプログラム」の開発と教育・福祉領域における活用モデル』は、発達障害のある高校生が、「卒業後の進学や就労を見据えながら、在学中から必要な準備を進めていけるように設計された実践的な教材」です。

発達障害のある人の中には、進学や就職の場面でうまくいかず、失敗や挫折を経験したことをきっかけに、「自分にはこうした特性があるのかもしれない」と気づくケースも少なくありません。そうした経験が、自己理解や支援の活用につながることもありますが、できるだけ早い段階で、自分の特性や得意・不得意、不得意なことへの向き合い方について学ぶ機会があることは非常に重要です。

こうした背景の中、発達障害者支援センターという、発達障害のある人のライフステージ全体にわたる支援について専門的な知識をもつ機関が中心となり、「高校生段階で、どのようなことを優先的に学べるとよいか」が検討されました。その内容が、学校や放課後等デイサービスといった教育・福祉の現場で実際に使える形にまとめられたのが本冊子です。

「働くことを知る・学ぶプログラム」は、全 12 コマで構成されています。内容には、学校と職場の違い、挨拶・報告・連絡・相談、生活習慣、作業体験を通じた自分の得意・不得意の理解などが含まれており、卒業後の就職先や進学先での生活はもちろん、現在の学校生活や家庭生活、放課後生活にも役立つものとなっています。各コマの学習では、スライドを使った説明、ワークシートの記入、寸劇動画の視聴、作業体験とその振り返りなどを通じて、生徒が自ら考え、体験しながら学べるように工夫されています。

各教材には、発達障害の特性や心理的な側面への配慮も盛り込まれています。たとえば、イメージ化が苦手な生徒に対しては、スライドに多くのイラストを取り入れることで、視覚的に理解しやすくなるよう工夫されています。ワークシートには具体的な選択肢が用意されており、自分の考えを整理しやすい構成となっています。さらに、動画の視聴や作業体験を通して、学習内容をより具体的にイメージし、自身の特性に気づくことができるようになっています。また、冊子内では「障害」という表現を使用していないため、障害に関する認識が十分でない生徒への活用や、学級での一斉授業、グループ学習での活用にも適しています。

このような教材が、指導・支援の進め方とポイントが丁寧に記載された指導案と一式で提供されていることから、教育・福祉現場においてすぐに活用できる内容となっています。

前述のように様々な工夫がなされている本プログラムですが、特に注目したい点として、「自己理解」を深める取組が充実していることがあげられます。国立特別支援教育総合研究所（2024）が実施した大学・企業調査では、自己理解は進学先となる大学、就労先となる企業のいずれにおいても重要視されていることが報告されました。また、同研究所（2024）による高等学校調査では、進路に関する指導・支援がうまくいった好事例として自己理解の深化があげられていました。

こうした背景を踏まえ、本プログラムでは、生徒が自分の特性や得意・不得意、支援の必要性を肯定的に理解し、自分の言葉で表現できるよう、「プロフィールシート」や「自分のトリセツ（取扱説明書）」の作成といった活動が取り入れられています。これらの活動を通じて、生徒は「自分のセール

スポイントは何か」「どのような場面が苦手か・困るか」「どのようにサポートしてもらえるとよいのか」といった点を整理し、自己肯定感を高めながら将来を見据えることができます。このような学びは、進学先や就労先で「合理的配慮」を求める場面においても、大切な土台となります。

次に、本プログラムが「通級による指導」での活用を想定して設計されている点にも触れておきたいと思います。本プログラムでは、通級による指導において参考とされる、自立活動の 6 区分 27 項目(「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」)との関連が例示されており、指導内容の検討にあたり参考にできるようになっています。

国立特別支援教育総合研究所(2021)の調査によると、「自己理解」は小学校・中学校・高等学校のいずれの段階でも、また LD、ADHD、ASD といった発達障害の特性を問わず、通級による指導の中で多く取り上げられていることが分かっています。本プログラムの「自己理解」に関する内容は、自立活動の「健康の保持(4)障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」や、「人間関係の形成(3)自己の理解と行動の調整に関すること」、また、「環境の把握(2)感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること」と関連があり、通級による指導の中でも取り上げやすい内容となっています。

また、先の国立特別支援教育総合研究所(2024)の調査では、発達障害のある高校生に対する進路に関する指導・支援は、通級設置校では、通級による指導の時間を活用して行われていることが明らかにされています。このような状況を踏まえると、例えば、本プログラムの「生活習慣」に関する内容は「健康の保持(1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること」、また、「報告・連絡・相談」に関する内容は「コミュニケーション(5)状況に応じたコミュニケーションに関すること」といった項目と関連付けて取り組むことも考えられます。

ただし、通級による指導は、自立活動の内容を全て取り扱うものではなく、生徒の学習面や生活面における中心的な課題を見きわめて、その課題に即した指導内容を選んで取り組むことが基本です。そのため、本冊子の内容をそのまま使用するのではなく、生徒の実態に応じてカスタマイズしながら活用することが求められます。本冊子でもその点が押さえられており、プログラムに生徒を合わせるのではなく、プログラムの中から生徒に合った内容を選ぶことの重要性が示されています。

最後に、本冊子には複数の学校や放課後等デイサービスでの活用事例が紹介されています。それぞれの事例では、実際にどのような工夫が行われたかが具体的に示されており、実践に向けた参考資料としても有用です。

今後、本プログラムがさらに多くの教育・福祉現場で活用され、現場での実践とフィードバックを重ねながら、より良いかたちへと発展していくことを期待しています。そして、こうした実践の積み重ねの過程の中で、教育・福祉現場がつながり、保護者と連携しながら、生徒一人ひとりの「自分らしい生き方の実現」を支えていける体制づくりが進むことを願っています。

文献

国立特別支援教育総合研究所(2024)高等学校における障害のある生徒の社会への円滑な移行に向けた進路指導と連携の進め方等に関する研究.
https://www.nise.go.jp/nc/report_material/research_results_publications/specialized_research/b-405 (2025/03/24 参照).
国立特別支援教育総合研究所(2021)社会とのつながりを意識した発達障害等への専門性のある支援に関する研究―二次的な障害の予防・低減に向けた通級による指導等の在り方に焦点を当てて―.
https://www.nise.go.jp/nc/report_material/research_results_publications/specialized_research/b-372 (2025/03/24 参照).

謝辞

今回、調査協力をいただいた教育・福祉領域の機関のご担当の皆さまには、貴重な実践のご経験を教えていただきました。また、私どもが開発したプログラムを導入してくださったことに対し、感謝申し上げます。実際の教育現場や支援現場からの率直なご感想やご意見をいただけたことは、私どもの支援のあり方に対しての振り返りと、改めて支援に求められる要素や展開を知る貴重な機会をいただいたと感じています。

本研究をまとめるにあたり、研究会を通してご協力いただいた有識者・関係機関の皆さまには、本研究に関心を寄せていただき、たくさんのご協力とご示唆をいただけたことに深く感謝申し上げます。そして、本研究を進めるにあたり、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所発達障害教育推進センター榎本容子先生には、本研究の成果を支援現場で活かしていただくために必要な視点を数多くご教授いただけましたこと、また、大変お忙しい中にも関わらず豊富な知識と専門的な見地からコメントをいただけたことに深く感謝申し上げます。

最後に、本研究を進めるにあたり、多くの方々から客観的な評価をいただく機会と、その成果を多くの方々にお伝えする機会をいただいた、「公益財団法人明治安田こころの健康財団」のご支援に御礼申し上げます。

＜引用・参考文献＞

はじめに

- こども家庭庁(2024):放課後等デイサービスガイドライン(令和6年7月). https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/7692b729-5944-45ee-bbd8-f0283126b7db/def1acaf/20241101_policies_shougaijishien_shisaku_guideline_tebiki_06.pdf(2025/01/15 参照).
- 岡山県こども・福祉部障害福祉課(2024):雇用者向けハンドブック　発達障害のある人と共に働くために　第2版(R6年3月発行). https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/919509_8796997_misc.pdf(2025/01/15 参照).
- 中央教育審議会(2011):今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf（2025/03/09参照).
- 薬師寺明子、おかやま発達障害者支援センター(2023):障害のある人を対象としたオープン・カレッジの実施:発達障害のある高校生の進路選択支援・知的障害のある人への学習機会の提供. 美作大学・美作大学短期大学部地域生活科学研究所所報, pp41-47.

Ⅰ「働くことを知る・学ぶプログラム」の概要

- 榎本容子(2023):就労に向けて高等学校で期待される指導・支援について教えてください. 発達障害のある高校生のキャリア教育・進路指導ハンドブック－就労支援編－. 榎本容子・井上秀和編著. 学事出版, pp42-47.
- 榎本容子(2023):進学に向けて高等学校で期待される指導・支援について教えてください. 発達障害のある高校生のキャリア教育・進路指導ハンドブック－進学支援編－. 榎本容子・井上秀和編著. 学事出版, pp38-43.
- 日戸由刈(2013):就労への道のりに存在するバリア. 本田秀夫・日戸由刈編著, アスペルガー症候群のある子どものための新キャリア教育. 金子書房, pp.22-29.
- 梅永雄二(2015):15歳までに始めたい！発達障害の子のライフスキル・トレーニング. 講談社

Ⅱ 個別のニーズとプログラム内容

- 国立特別支援教育総合研究所(2020):高等学校教員のための「通級による指導」ガイドブック おさえておきたいQ&A. https://www.nise.go.jp/nc/cabinets/cabinet_files/download/1079/d7f998d2d7022ddb169848956db11b2d?frame_id=1235（2025/01/15 参照).
- 岡山県教育庁特別支援教育課(2020):高等学校における通級による指導スタートブック. https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/650291_5622186_misc.pdf（2025/01/15 参照).

Ⅲ プログラムを活用した教育・福祉領域の機関への調査より

- 国立特別支援教育総合研究所(2021):発達障害のある子供の教育に関わる全ての教員の皆さまへ　もしかして、それ･･･二次的な障害を生んでいるかも･･･?. https://www.nise.go.jp/nc/cabinets/cabinet_files/download/1079/08f50f2da9864d68fd321cb3595a1aaa?frame_id=1235(2025/01/15 参照).

Ⅳ 教育・福祉領域における活用例

- 文部科学省(2018):高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説　総合的な探究の時間編. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/11/22/1407196_21_1_1_2.pdf（2025/01/15 参照).
- 文部科学省(1993):総合学科について. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/seido/1258029.htm（2025/01/15 参照).
- 兵庫県立上野ケ原特別支援学校.「働く人になるために自立活動で取り組む内容」. https://www2.hyogo-c.ed.jp/weblog2/uenogahara-sn/wp-content/uploads/2023/10/R5hatarakuhitoninarutameni.pdf（2025/01/15 参照).

Ⅴ 資料編

- 井上雅彦編著(2011):自閉症の子どものためのABA基本プログラム3　家庭で無理なく楽しくできる生活・自立課題36.学研教育出版.
- 株式会社 Kaien. 当事者の声「キスド会」. https://www.kaien-lab.com/tag/kisudo/（2025/01/15 参照).
- NHK【特集】発達障害って何だろう 困りごとのトリセツ(取扱説明書). http://www1.nhk.or.jp/asaichi/hattatsu/（2025/01/15 参照).
- 小関俊祐・髙田久美子・嶋田　洋徳編著(2020):自立活動の視点に基づく高校通級指導プログラム　認知行動療法を活用した特別支援教育. 金子書房.
- 吉田友子(2011):自閉症・アスペルガー症候群「自分のこと」のおしえ方―診断説明・告知マニュアル .(ヒューマンケアブックス).学研プラス .

イラスト:イクタケマコト 「中学・高校テンプレート集」「中学・高校イラストカット集」 学事出版

公益財団法人　明治安田こころの健康財団
第６０回（２０２４年度）研究助成

発達障害のある高校生への卒業後を見据えた発達支援
「働くことを知る・学ぶプログラム」の開発と教育・福祉領域における活用例

2025 年（令和 7 年）3 月発行

社会福祉法人旭川荘　旭川荘療育・医療センター
おかやま発達障害者支援センター
〒703-8555　岡山市北区祇園 866　　TEL:086-275-9277

（転載または引用の場合は必ず出典を明記のこと）

印刷所：障害者支援施設　吉備ワークホーム